

---

# 食われた俺のゼロ魔戦記

ろんろま

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

食われた俺のゼロ魔戦記

### 【Nコード】

N4663Y

### 【作者名】

ろんろま

### 【あらすじ】

聖剣世界に転生して、地道に生活していた俺はある日竜帝に（食事的意味で）食べられた。その竜帝も倒され、ああこれから滅ぶんだなと思っていたら目の前に光の帯が！これはいくっきやないだろう！

これは竜帝に食われた主人公が、竜帝を相棒として異世界でいろいろやっていくお話です。捏造、原作ブレイク、最強上等！（竜帝が）。主人公は中ボスぐらい。

## ブローグ（前書き）

気づいたらやっていた。ドラマたのネタが思いつくまで気分的に更新予定。

これはアナログプロットがあるので更新早いかも。  
ドラマたエ…。

## プロローグ

…ああ、終わってしまったのか。

デュランの奴が竜帝の喉を貫いたとき『中』でそう思った。

この聖剣世界にハーフェルフとして転生して早三十年。

一年前にこの竜帝に食べられて、ずっと止まっていた時がようやく流れるみたいだ。

転生した最初は呆然としたなあ。なんせトラックに弾かれて気づいたらミラージュパレス。

普通こういうのって転生特典とかあるだろうに何もなし、強いて言えばハーフェルフなだけだった。

まあ、折角なので原作ブレイクしてみたいじゃん？

って感じで主教様に魔法を教えてもらったり、ロジエたちと平和に過ごしてたけど、何も出来なくてさ。

悔しかったな。

でも所詮現実なんてそんなもんだ。

原作通り世界大戦が起きて、壊れていく主教達を年齢よりもずっと幼い体で悲しく見てた。

やがて反乱軍となったロジエたちと合流したけど、テケリよりもちつこい俺は何も出来ず、カオスオーシャンに消えていく家族を見ていた。

…最後にちゃんとお別れできたのが救いだっただ。

その後、俺はベルガーさんに引き取られ、神官修行に明け暮れた。あ、ヒースとも仲良くなったよ？

優しい聖都生活の中、すさんだ心は少しずつ癒された。

…リロイを救うことは出来なかったがな。でも、数年寿命を延ばすことは出来た。

あの時は久々に泣いた。中身はとくに成人してるのに子供みたいにな。

それから色々あって、修行を続けた俺は竜帝退治の回復役として無理矢理くっついていった。

丁度この時期ロキさんが死んでしまうのを思い出したからだ。

ベルガーさんはこの時不治の病にかかっていた少女を看っていたから、そのかわりにな。

結果的にロキさんは救えた。ただ、フェアリーは竜帝の隙を作るために…。

攻撃魔法をそんなに使えなかった俺はこの日を機に攻撃魔法も学んだよ。

聖都に戻ると、ベルガーさんが泣いていた。

禁呪を使っても少女を助けようとしていたけど、他でもない少女に断られたらしい。

彼女は人間のまま死ぬことを選び、一月後亡くなった。

…後で思い出したんだがこれでベルガーさんの反乱フラグが消えたんだ。

俺は少女に出来る限りの感謝をしたよ。

養父の凶行を止めてくれてありがとうって。

彼女は笑いながら 逝った。

当然、手厚く葬ったさ。

俺達は彼女の分まで人を救おうと決意新たにし、そこから11年経った。

たまたまアルテナにきていた俺は、魔法練習している男女に出会ったんだ。

あまりにも必死な姿に、つつい声をかけてそれがアンジェラ王女と後の紅蓮の魔導師だと知った。

まあその時はそこまで思い出してなかったが。

何とか魔法を使わせてあげたいな、と思った俺は二人を連れてウンディーネを訪ねてみた。

俺のお願いにウンディーネは快く頷いてくれて、二人は何とか水を

出すことに成功。

紅蓮さんは魔力が少なかったからちよびっとしかでなかったが、アンジェラ王女は滝のように出た。

…死ぬかと思っただぜ。

まあ魔法使えるようになってよかったな、と祝って俺はアルテナを出る…筈だった。

紅蓮さんがクオン大陸へ行ってしまったのだ。

あそこは倒したとはいえ竜帝の眠る場所。

アンジェラ王女に頼まれた俺はすぐさま連れ戻しにいき…既に復活していた竜帝に喰われた。

そこからの記憶は非常に曖昧だ。

なんとなーくナバルとローラントへ行った覚えはあるんだが…何をしたかなんて覚えてない。

でも良いことをした気がするのは何でだ？

はつきり覚えてるのは仮面かぶって各地のマナストーン解放してたぐらいかね。

多分どころか絶対洗脳されてたんだな、俺。

自我取り戻したのはどっからだったけ…。

敵対組織をぶっ潰し、ドラゴンズホールで勇者たちと対面したとき

かな？

流石にかわいい妹シャルロットを見ればイヤでも起きる。

…シスコン言うな自覚してらあ。

その時の俺の台詞、こうだもん。

「来たな。マナの剣を寄越…シャルう！？」

「「！？」」

いやー、あれは面白かった。

敵味方関係なく驚いて俺見たからね。

まあそんな感じで洗脳解けた俺ですが、あっさり竜帝に連れ戻されちまって。

役に立たん！と罵倒されて再び洗脳…されかけたけどじっくりお話して、きちんと手を抜かず戦うと確約した。

それまで自由にしておけると言われたのでウエンデルへ戻り、ベルガーさんとヒースにお別れを言いに行った。

勝手に死んでごめん、さよならって。

…今思うと竜帝の一欠片の情けだったかもしれん。ちょこっとだけ感謝してやる。



で、ドラゴンズホールに戻った俺は約束通り本気で勇者たちと殺し合って…負けた。

いやー、あいつらもう相当の化け物だぜ。

だが、シャルロットには悪いことした。

俺はもうアンデッドだから、もう聖都には帰れないって。

…大泣きされて打たれるわ蹴られるわ、ま、俺が悪いんだけどな？

男二人も辛そうだった。

おいこら、野郎がそんな情けない顔するんじゃない。

そう叱って、シャルの頭をなでて俺は滅んだ。

そして今、俺は竜帝の中にいる。

真っ黒な空間で、竜帝が恨めしそうに俺を見ていた。

『貴様が奴らを殺していれば、こんなことには』

いやいや無理だって。

見ただろ、あいつらのチカラ。

今おまえが滅んでいるのが何よりの証拠さ。

『…くつ、いつの時代も邪竜は滅ぼされるのみか』

まあ、そういうことなんだろう。

でもお前はよくやった方じゃないか？ そりゃあ神様殺すなんて許せないが、出来ることでもない。

『貴様に言われても空しいだけだ…』

はいはい。

ほら、とつとと滅ぶぞ。それで次行くんだ次。

『次だと？』

転生って知ってるか？

実際に体験した俺が言うんだから、次に転生して一緒にバカやろうぜ。

『貴様、どこまでアホなのだ…我らはこのまま滅ぶ運命、女神にも覆せぬ』

まあ普通はそうだろうな。

でも、何となくそうならない気がする。

『これは！？』

光の帯が俺たちの目の前を横切った。

とてつもないエネルギーだ。ひょっとしたら滅びかけた俺達を呼び込めるかもしれないぐらいに。

「行こうぜ竜帝！ あっちで新たに人生始めよう！」

『…いいだろう、ここまでくれば未練もない。貴様につきあってやる、ハーフエルフ！』

そこは名前で呼ぶところだろう！

何、忘れた？

しょうがない…。

「俺の名前はイオ！ ハーフエルフのイオだ！ しっかり覚えろよ相棒！」

『誰が相棒だ！ 元配下の分際で！』

そう言つて、俺達は光の帯の中に飛び込んだ。  
だが、その後を追うかのように八つの光が飛び込むのには、気づけなかった。

## こんにちは異世界

光の帯を抜けた先に、女の子がいました。

俺達の目的である肉体再生がうまくいったと思ったら、これどういう状況？

落ち着け、俺達の状況を確認しよう。

肉体の再生は出来てる、理屈は知らん。

俺は竜帝に食われた時の服装のままで、ゆったりとした雪国の服だ。

対して竜帝。こちらは打って変わって王様が着るような豪華な服だ。

…っ！か何故人間の姿になってる？

まあ本来の姿はでかすぎるにも程があるから良いんだけど。

それにもう一つ。

何か俺異常に怯えられてませんか？

「ゼロのルイズがエルフを召喚した…」

「エルフだけじゃないぞ、どこぞの貴族と平民まで…」

ん？ 平民？

きよろつと辺りを見回して見ると、ばかんとしている黒髪の少年がいた。

どういう状況か判ってないなこりゃ。そこは俺達も同じだが。

「コルベール先生！ 納得がいきません、儀式のやり直しを！」

俺たちを呼び出したっぽいピンク髪の美少女がちょっと禿気味の男性に言う。

ふむ、儀式と言っていたし結構大事な事なのかね？

「すみませーん、状況の説明を求めます」

「さもなくば貴様等塵も残さず消すぞ」

おいこら！

何物騒なこと言ってるんだよ！

「は、何を言う。我は竜帝ぞ、何故下等な者共を氣遣わねばならん」

…そつえばおまえはそういう奴だったな。

まあいざとなったら俺が抑えればいいし。抑えられるかなんて聞くなよ！

男性は少々冷や汗をかきながら、しかし油断なく言った。

「判りました、説明しましょう」

曰く、これは使い魔召喚の儀式だそうで、ここにいる彼女の進級がかかっているらしい。

ここ学校だったんだな。聖都にも似たようなのがあった、ここまで豪奢じゃないけど。

話は戻すが、同時に複数の使い魔が召喚されたことなど未だかつてない上、俺がエルフというのが問題らしい。

契約してくれるのか否か。

契約の方法はキスらしい。

「俺は良いよ。そもそもお嬢さんに呼ばれなきゃ死んでた身だし」

「…私も特別に許可してやろう。そこな小僧はどうする？」

「お、俺？ …うーん、その子が困ってるなら別に良いけど」

少年、キスすること前提に考えてるか？

…多分考えてないだろうなー、何というか能天気っぽい。

しかし竜帝が許可を出したのは意外だ。使い魔なんて絶対にやらなさそう

「……（じゅるり）」

食う気だ。あの目は捕食者の目だ。

これはいかん、竜帝から絶対に目が離せなくなった。

そんな俺の心配を知ってか知らずか、美少女はふるふると震えながら俺たちを見た。

「…か、感謝なんかしてないんだからね！ へへへ、平民が貴族とこんなことできるのに寧ろ感謝しなさいよ！」

そう言つて、美少女は呪文を唱えつつ俺たちとキスする。

…えーと、何かごめん？ でもちよっぴりどきどきする。どーせフアーストキスだよ！

ズキッ！

「あいたっ！」

右手が焼けるように熱い！

…だが、まあそれだけだ。実際に致命傷負って死んだ身としては我慢できなくもない。

「ふむう…珍しいルーンですね。少しスケッチさせて下さい」

ああ、どうぞどうぞ。

あんまり興味ないんで。

少年は左手、竜帝は俺と同じく右手に刻まれたみたいだ。

…俺たちの言葉と少し似ているな。少年のはガンダーヴル？

俺たちのは…しん、く、ろ。シンクロ？

まあ読み方があってる保証なんてないが。

「ではこれで春の召喚の儀を終わります。ミス・ヴァリエールは彼らとじっくり話し合って下さい」

「え！ コルベール先生！？」

「大丈夫、契約は済んだのだから。それに、エルフと言っても彼は無害だと思えます」

…この世界のエルフは鬼か悪魔か？

流石に俺は自分より弱いもんをいぢめる趣味はない。

「まあ、改めてよろしくお嬢さん、少年。俺はハーフエルフのイオ」

「我が名は竜帝。他を知りたければ対価を寄越せよ？」

「えっと、俺は平賀才人。あのさ、これ何のドッキリ？ 早く家に帰りたいんだけど…」

ん？

サイトよ、召喚の意味分かってない？

こついうのって呼び出されるかは本人の意思で、しかも一方通行だろう？

「ええっそうなのか!？」

「呆れた…あんたちゃんとゲートを見て私の呼びかけに応えたの？」

「いやだってさ、あんな面白そうなの見たら…入りたくなると言うか」

まあ同意はするさ。

似たような理由でやってきたからな俺達。

しかしそうになると、サイトを元の世界へ戻してやる術が必要になるな。

服装からして、この世界の人間じゃないし。



ファ・デイルでもあんな服ないぞ。

「サイトのことは追々考えるとして…ルイズ嬢、ここではエルフは恐怖の対象なのか？」

「何言ってるのよ！ 私たち人間から聖地を奪ったエルフは敵よ敵！ あんたもエルフなら………そういえばあんたハーフなの！？」

そんな驚いた目で見んでも。

何々、詰まるところ俺はルイズ嬢たちの宗教じゃ異端なんですか。ほお…。

「一度、その宗教の開祖にお話してやりたい気分だ…」

「ふん、女神の教えは全ての愛を平等にだったか？ まあ元神官な貴様には許せん内容かもな」

そーだよ俺は元々クレリック！

詰まるところは聖職者。まあ他教にうだうだ言つつもりはないが、人間以外全て敵ってどんなだよ。

人も亜人も仲良くなれるつつの！

これで聖職者にマトモなのがいなきゃ弾圧しにいくかもしれない…。まともな奴いますように！

「元神官：もしかしてイオってすごいのか？」

「ん？ 回復魔法なら得意分野だよ。たとえ瀕死の重傷になろうとも一瞬で回復してやるぜ？」

ごくり、と二人が息を飲むのが判った。  
この世界の魔法じゃ無理なのかね？

「回復に関しては貴様とその妹が規格外すぎるだけだろう」

なんだあの超回復、どれだけ魔法撃とうと死なないなんてどんなホラーだ、と竜帝はつぶやいた。

…気持ちは分かる、次でトドメと思ったら傷一つなかったなんてザラだからな。

しかしシャルロットが竜帝のトラウマになってるとは思わなかった。

「あ、そうだ。

一応使い魔の仕事言っとくわよ？

ひとつは感覚の共有。でもこれ何も起きてないわね？」

感覚というと視覚や聴覚とか？ ぜんぜん共有されてないな。

「二つ目は宝石や薬草の収集。でもこれもあんまり期待してないわ。  
三つ目、主人を護ること。あんたたちって戦えるの？」

「我をなんだと思っている、竜を統べる帝ぞ。世界を滅ぼせる程度の力は持っている」

俺除く全員が盛大に吹き出した。  
比喩なくそれだから困る。

「えつと俺は…喧嘩ぐらいならいけると思っ」

「ラスボス以外なら大体イケる」

特に広範囲殲滅戦が得意だよ！とは口に出さない。まあその気になればこの学校壊すぐらいのチカラあるし…。

あ、ルイズ嬢呆れてる。

「はいはい、あんまり期待しないわよ。

あ、そうだ。流石に人間が、それも三人も召喚されると思わなかったから、寝床の準備がなくて。

その、外で寝てもらえないかしら？」

ん、野宿かぁ。うん、俺はかまわんよ。

…何さ竜帝。その不満そうな顔。

「いやにあっさり頷いたわね」

「でもさ、テントとかはどうするんだ？」

良い質問だサイト。

だが問題はない！俺には倉庫があるからな！

ファ・ディールいちの便利魔法『倉庫』から、テント用具を引っ張り出す。

中身が無事で何よりである。

ルイズ嬢があり得ないものでも見ている目を向けてきた。いつとくが旅人なら使えて当然なんだからな！？

こうして、俺と竜帝の異世界一日目は終わった。

…ただ、流石にテントに男三人は失敗だったと記しておく。おえ。

## こんにちは異世界（後書き）

### 第一話。

規格外なのは当然です、一応は黒曜の騎士の代わりなので近接戦闘も割といけます。

堕ちた聖者の戦い方に近いかも。召喚は出来ませんがね。代わりに狂ったようにエインシャントを使うのがイオです。使用魔法は割と手広いんですが出番あるのかなー…。しかしこの小説、空気が多そうである。

## 異世界2日目（前書き）

予定では決闘編まで行くつもりだったのに…あれ？

## 異世界2日目

「うわぁ…ひどい目にあった」

テントの外にでると、まだ夜が明けた頃じゃないか。  
神官の時の癖でそんな時間に起きてしまった。

サイトと竜帝はまだ寝てる。

しかし…夢じゃなかったんだなあ。

そうだ、軽くお祈りして散策しよう。

学校内はともかく、近くの森ぐらいいならいいだろう。  
では女神様、今日も一日が良い日でありますように！  
この世界には女神様いないだろうけどね。

散策終了つと！

ん？ 森の生態系とか植物とか調べてただけだぞ。  
似てるようで似てないのが多かった。…魔法の植木鉢作って育成で  
もするか？

種も倉庫に放り込んでいたし。

そんなことを悩んでたらいつの間にか陽が高いな。  
さすがに起こそう。

「おーい、朝だぞ」

「あと五分…」

「……」

… お前から起きる気ないだろう。竜帝なんか防音結界張ってるし。ちなみに竜帝は浮いて寝てる。雑魚寝が嫌だったらしい。

相当シールドだ… テントがそれなりの大きさはなきゃならないと思う気だったんだ？

まあ起こすけど。

「アンティマジック」

べちっ！ 魔法効果が解けて竜帝が落ちた。頭から落ちた気がするが大丈夫だろう。

「サイト」

「…ふひひ」

うわぁ、いらつとくる。

優しく起こそうと思ったけどやめた。

「必殺！ はりせんちょおっぷ！」

「ぶふぉ！？」

ズパーン！！と良い音が鳴った。

うん、あの時シャルにやられたんだがよく効くな！

「貴様：元配下の分際で…」

あ。

\*

楽しいお勉強の時間だ！。

え、やけに棒読み？ あの後どうしたって？ 聞かないで下さい。

強いて言うなら朝ご飯食い損ねたな。

で、現在ルイズ嬢の授業に同席中。全員そろってな。

「おや、ずいぶん珍しい召喚をしましたね、ミス・ヴァリエール」

俺達割り込みましたから。

するとふとつちよの少年が立ち上がった。

「どうせその辺の平民を連れてきたんだろ！ ご丁寧に飾り耳までつけて！」

「何ですって！？」

飾り耳じゃねえぞ！と、言いたいところだが黙つていた方が良いなふとつちよよ、是非とも広めてくれ！

「大体サモン・サーヴァントで三人も呼び出すのが可笑いなんだよ、ゼロのルイズ！」



「ミス・シュウルーズ！ 侮辱されましたわ、風邪っぴきのマリコル又に！」

「か、風邪っぴき…僕は風上のマリコル又だ！」

これは…二つ名かなんか？

しかし風上と言うことは風の魔法が得意なのか。でもルイズのゼロってなんだ？

あ、先生が粘土を飛ばして黙らせた。

うんうん、先生は怒らせちゃいかんよな。

昔、魔法の師匠だったベルガーさんを怒らせたときなんか…やめよう。ダークリッチの幻影が見える。

つと、ちよつと意識飛んでたな。

危つく魔法講義を聞き逃すところだった。リンク分け理解！

しかし面倒な魔法だ。杖がなきゃ使えないなんてな。

「なあなあ、ルイズの系統って何なんだ？」

「わ、私は…その…何でも良いじゃない！」

おーい、五月蠅いと先生に叱られるぞって遅かった。眼鏡が光ってる…。

「ではミス・ヴァリエールに錬金を実践してもらいましょう」

ビクツとクラスが凍りついた。

…何だ？ 怯えてるぞ。

青い顔をした赤毛の美女が立ち上がった。

「先生、やめてください！ ルイズは！」

「何です、ミス・ツエルプスト！。よもや貴女まで彼女を侮辱するわけではありませんね？」

「違います！ ルイズの魔法は危険なんです！」

「？」

妙だな。クラスの様子からしてもただ事じゃない。だが、観察しているうちにルイズ嬢は行ってしまった。

「竜帝」

「面倒だが…心得た」

生徒はみんな机に隠れてしまったので、俺達だけ防御魔法を展開する。

ちゅぽん！

「げっ！」

思わず声にでてしまった！

ルイズの魔法はとんでもないな！ 竜帝の防壁を揺るがすとは。

「ちよっと、失敗してしまったみたいね」

無事なようで何よりだけど、煤けてるよ。

結果、ルイズ嬢はぼろぼろになってしまった教室の片づけを命じられた。

俺達も手伝いを申し出たが…気まずい。

ルイズ嬢は泣いていた。

「…魔法成功率0。だからゼロのルイズ…笑っちゃうでしょ。

学院では、いいえメイジなら使えて当然のコモンマジックすら失敗しちゃうんだもの、お似合いよね」

そう言つて、自嘲したように笑う。

既視感におそわれる。俺はかつて、似たような人に出会った。

『魔法を使えるようになって、みんなに認めてもらいたいの！』

「アンジェラ王女…」

眩きが風に消えた。

目の前の少女は、同じ苦しみを背負っている。

サイトが言った。

「似合ってねえよ。そんなの、全然似合わない！」  
「サイト？」

「爆発するからなんだよ、それだって立派な魔法だろ！  
他の誰にもできない、ルイズだけの魔法だ！」

「そう、その通りだ。…ルイズ嬢、聞いてくれる？」

「…何よ」

「魔法が使えなかったお姫様のお話」

ルイズ嬢が目を見開いた。

それを肯定と受け取って昔話のように話し始める。

「とある魔法王国に、一人のお姫様がいました。

お姫様のお母様は、魔法王国最高の魔法使いでしたが、お姫様は魔法を使えませんでした」

すっと竜帝が目を向けてくる。かまわず続けた。

「お姫様は魔法王国の姫、魔法が使えなくてはなりませんでしたが、  
ですがどんなに頑張っても魔法が使えることはありませんでした」

「そのお姫様は、どうなったの？」

震える声でルイズ嬢は言った。

「見かねた神官が、精霊を頼りチカラの振り方を教えてくれました。

その結果、お姫様は魔法が使えるようになったのです」

「精霊…？ そのお姫様が使ったのは系統魔法じゃないの？」

いやこれ違う世界の話だしね、とは言わない。

「彼女は、生まれ持った魔力が大きすぎたんだ。人の身では扱えないほどに。」

だから神官は強い力を持つ精霊に頼んで、チカラの振り方を教えてあげたんだ」

ルイズ嬢も同じじゃないかな、と竜帝に目を向ける。

「そうだな。小娘は我が見ても目を見張る魔力…こちらでは精神力だったか、を持っている。」

思わず食らいたいぐらいのな」

一瞬、臍気なドラゴンの姿が見えた気がした。  
何度か見た、竜帝の本性。

「…嘘、私がそんなチカラ、持ってるわけ」

「疑うなら疑え。安心しろ、貴様は魔法が使える。チカラの振り方さえ覚えれば、特別飛び切りのな」

ん？

特別飛び切り？

「最後まで教える義理はない、後は自分で考えろ。それより腹が空いた」

「…そうだな、早く片づけて飯行こうぜルイズ！」

「…もうっ気安く名前で呼ばないでよ！ 使い魔のくせに！」

どうやら調子を取り戻せたみたいだ。よかったよかった。

ところで竜帝、さっきの言葉って…もしかして？

「何も言っな」

「…ん、そうだな」

まだ誰も気づいてないだろう。  
ならばその方がよい。

さて、ちゃっちゃと片づけてご飯に行きますか！ 竜帝も手伝えよ  
な！

## 異世界2日目（後書き）

魔法紹介！

アンティマジック：

敵一体の全魔法効果解除、初期化。

ここでは解呪の基本魔法として扱う予定。割とよくでる？

はりせんちよつぷ：

聖剣伝説3主人公の一人シャルロットのクラス3プリーストの必殺技。

例の戦いでやられる以前から持っていたハリセンを使用。何故持ってたかは謎。

別れの戦いの時には容赦なくシャルロットに使われた。

余談だがそのカウンターでエインシャント浴びせたが倍返しが来た模様。要するに袋叩きである。

一応ただのハリセン。

決闘？いやいぢめだろこれ（前書き）

決闘編。

正直ここはあまり覚えてなかったり…。

タイトルは、お察し下さい。



決闘？ いやいぢめだろこれ

決闘だ！

金髪の少年が高らかに声を上げた。ただしそれはサイトの方。

俺はというと、同じく金髪なんだけどどこか陰険そうな少年に睨みつけられていた。

身に覚えが無さすぎるんですが！

少年が言った。

「ここは、貴族専用の食堂だ。そしてそこは僕の席でもある…意味分かるな、平民？」

俺が座っているここは竜帝が座っている席の隣である。  
厨房行くぞって言うっても聞かなかったんだよ…。

面倒事の予感。

「その付け耳といい、そっちの偉そうな態度といい、躰がなってないようだな。

さすがあのゼロの使い魔だ、品がない！」

「…食事中に騒ぐことの方がマナー違反、品がないと思うんだが」

それにルイズ嬢は関係ないだろうに。

あ、本音がぼろっと。

「貴様、貴族を侮辱するか！」

「侮辱も何も貴様の方が品がないだろう」

そう言つて優雅に食事を続ける竜帝。

おい、火に油注ぐな。

あーあ、陰険少年の顔が真っ赤だ。

「決闘だ！ 平民は平民らしくすることを教えてやる！」

「だが断る。食事の邪魔だ、失せろ」

同感だがもうちょいオブラートに包めよ竜帝。

すると、陰険少年は悪戯を思いついたかのようにニヤリと口角を上げた。

「そうか、怖いんだな？ そんな風に貴族の真似事をしようとも所詮は平民。」

僕達貴族に比べれば下等な存在だ」

ピクリと竜帝の指がふるえた。

やばい、本気で怒ってるかもしれん。そうなったら世界終わるぞ。

…はあ。

「陰険少年。相棒の悪口はそこまでにしてもらおう」

「陰険少年…だと？」

「性根の腐ってる悪ガキには陰険少年でも上等な呼び名だ、有り難く思おうか。」

それにルイズ嬢も馬鹿にされたのじゃ黙ってられなくてね、決闘は俺が受ける」

思い切り貶すようだが少年のためだ！

さすがに聖職者としては自殺志願者を見捨てるわけには行かないし。

少年は乗るかな？

「いいだろう、その付け耳切り落としてやる！」

うお、物騒な。

つて竜帝笑ってやがる…ハメられた！

そんな訳で何とかの広場。

どうせなら2対2でということになったんだけど…うーん。

「サイトかばうのは面倒くさいから…気障男くん丸投げして良い？」

「ちょ！」

だってサイトの売った喧嘩だろうに。

俺、基本は護身術しか使えないんだよ。

フレイルあればまとめて相手できるけど、使うのハリセンだし。

この方が屈辱的だからな！

「そんな紙切れで僕たちを相手するのか？」

呆れた目を向けてくる陰険少年もといヴィリエ。

いやいやこれで十分すぎるぐらいだし。

「サイト、イオ、やめなさい！ 今なら二人とも許してくれるわ！」

「ごめん、ルイズ。でも下げたくない頭は下げたくないんだ！」

「似たような感じ。大丈夫、負けないよ」

「　　っ！　怪我するんじゃないわよ！」

それだとサイト無理じゃね？

気障男くん　ギーシュが杖を掲げる。

「では、始めよう！　僕は青銅のギーシュ、土のドッドメイジだ！」

「風の名家ド・ロレーヌのラインメイジ、ヴィリエだ！」

「俺は平賀才人！　おまえらのいう平民だ！」

「名乗るのかこれ？　…ただのイオだ」

「行くぞ！」

ギーシュの一声で戦いが始まった。

ギーシュは人形を生み出し、ヴィリエは風を放つ。

順番バラバラか。おい、連携プレーしろよ。

放たれた風を軽くかわすと、周囲が息を飲んだのが判った。

「それが本気か？」

「っ、なめるな！」

杖に収束する風が増えたが…まだまだそよ風だな。軽くかわせる。それよりサイトの方は、早くもやばいか？ 人形に翻弄されてる。怪我するなって言われてるし、さっさと終わらせますか。

「この、なんで当たらないんだ！」

「答えは単純、陰険少年のレベルが足りないだけだ！」

ズパパン！

手に持つハリセンが、ヴィリエの頭と手をとらえた！

単純なダメージよりも、耳元で鳴った強烈な音に、ヴィリエは杖を落とした。

ヴィリエの杖を拾ってにつこり笑う。

「お前の負けだ」

「…！ 嘘だ、この僕が平民なんかに！」

ヴィリエが吠えているが無視。

「サイト、手伝うぞ」

「手を出さないでくれ！」

はい？

いやいや、そんなぼろぼろな体で何言ってるのさ、やられるぞ？

「判ってる…でも、これは俺の喧嘩なんだ。俺がけりを付けなきゃ意味がないんだ！」

それに、俺はこいつにルイズをバカにされたのが何より許せねえ  
「！」

「……………」

…はあ。

ここまで言われちゃ手を出す気も起きんよ。

「判ったよ、手当はしてやるから碎けてこい」

そう言うのと、サイトはにっと笑って再び人形に突っ込んだ。

そして数分後、見事にボコボコにされたサイトが出来上がった。

…流石にもう限界だな。

「サイト、もういいでしょ！ ギーシュ、やめてちょうだい！」

「ま…だだ、まだ俺はやれる…！」

「…本当に忠実な使い魔を持ったね、ルイズ。  
僕としても動けない相手をいじめる趣味はないし、いいよ、やめにしよう」

「まだだっ…！」

力強い叫びが、広場に響き渡った。  
誰も彼もが動きを止める。

サイト、お前…。

ギーシュは一瞬目を伏せて杖を振るった。  
花びらが一振りの剣となってサイトの前に突き刺さる。

「まだやる気なら、取りたまえ。これは君への贈り物だ」

「とっちゃだめ！ それを握ったら、今度こそギーシュは手加減しないわ！」

ルイズ嬢、止めても無駄だろうよ。

ほら、サイトは荒い息を繰り返しながらも…剣をとった。

ほう。

ん？ サイトの左手が光ったような…。

「！　…　なんだか判らないけど、力が沸いてきた。いける！」

「！？」

そんな！

あんなに弱ってたのに剣を構えた！？

剣を握ったサイトは、別人のようなスピードで人形を叩き壊し、ギーシュに剣を突きつけた。

ギーシュ、ヴィリエの負けが宣言される中、違和感が拭えない。

何なんだ？

「サイト！」

つと、思考にふけってる間にサイトが倒れた！

無茶しすぎだ全く！

鞆からはちみつドリンクを取り出す。高価な回復薬だが仕方ない！

「ルイズ嬢、薬だ！　これを飲ませてやってくれ！」

「え、ええ！」

見る見るうちにサイトの傷が癒えていく。

ふう、これで一安心か。

「す、すっごい回復力…これとんでもなく高価な薬なんじゃ…」



「高いは高いが人命優先、気にするな」

ホントはヒールライトのほうに緊急には向いてるんだけどな。

でも大っぴらに魔法使ったら目立つし、仕方ない。

…でも何か別の意味で目立った気がするのは何でだろう？

決闘？いやいぢめだろこれ（後書き）

はちみつドリンク：

聖剣伝説3 最高の回復薬。単体で999回復する。

ヒールライト：

回復魔法。効果は使用者の精神によって変動する。

イオはシャルロットと同じぐらい効果がある。

ハリセンで戦う元中ボス。

完全に遊んでます。

因みに竜帝は怒ったわけではなく、イオに発破をかけただけです。

## 盗賊騒ぎ（前書き）

追い回した生徒は主にモンモンとタバサ。

## 盗賊騒ぎ

決闘から五日経った。

あの後あの秘薬はどこで手に入れたのか聞かれたけど、作ったと言った。

異世界産だなんて言っても信じてもらえないからな。

実際作れないこともないし。

そうしたらしつこく聞いてくる生徒が出てきたり、お前ら最初の怯えぶりはどうしたんだ、と言いたくなる。

因みに基本は誤魔化して逃げてる。

ここ五日ずっと追いかけてっこだ。疲れた。

「どうせ貴様は目立たないわけがないのだ。いつそ医者だと名乗り、目立てばよいだろう」

「確かに医者と言えるけど」

聖都ウエンデルは別に寄付だけで成り立ってる訳じゃない。

そこで高度な医療技術を学び、外で医者として出稼ぎするのも神官修行に入ってるのだ。

…あくどいことやってる奴もいたにはいたけど、そういうのはたいてい自滅してたなあ。俺も潰したけど。

脱線したけど、俺はある程度以上の医療技術を備えてるから一応医者といえる。

「でも微妙なんだよなー…」

「まあ、どっちにしろすでに目立っているのだ。もっと派手な印象を植え付けてしまうのも良いだろう」

学院の先生叩きのめしておいてよく言う。

ギトー先生だっけ？ プライドズスタにされてたな、片っ端から風魔法弾かれてたし。

風のスクウェアなだけに自信があっただろうけど、相手が悪すぎた。

竜帝は嫌らしくも風魔法ばかりで攻撃し、とどめにエアスラッシュを使った時には、流石竜帝だと諦観しちまった。

…中庭の地形がちよびつと変わったただけで済んだのは幸いだろう。

当然だが、その後竜帝の行動に文句言う人間は俺たち除いていなくなつた。

噂では東方最強のメイジとか、実は人間の姿をしたエルフだとか言われてるし。

そんな訳で、竜帝は人のことをいえないと思う。

「あんた達、ここにいたの？」

「探したぜ」

ルイズ嬢にサイトじゃないか。

仲良くなって良かったけど、何か用かい？

「べ、別に仲良くなってないわよ！ それより、出掛けるから準備

しなさい」

「?」

竜帝と二人、顔を見合わせた。

「リュウティはいらないだろうけど、あんた達の武器とか買いにいくのよ。あと、私の用事」

曰く、近々舞踏会があるから小物を買いにいくらしい。

…女の子の買い物って長いんだよねあ。シャルロットなんかすごく長かったし。

武器を買ってくれるみたいだけど、正直求めるレベルの武器があるとは思えない。

まずフレイルあるか怪しいし。それに…

「残念だけど遠慮しておくよ。二人でデートしておいで」

「ででデートですって!?!」

うわ、わかりやすい。

サイトの方もほんのり顔を赤くしているし。

「デートだろ。お兄さんはほっというて行ってきな」

「お兄さんって…イオ何歳なんだ?」

「29歳」

「「嘘!？」」

ハーフェルフは成長が遅いんだよ。  
肉体的には15、6歳だが。

「エレオノールお姉様よりも上だなんて… エルフってみんなそうなの？」

俺は成長早い方だよ？

まあエルフが人間とは比べものにならない寿命を持っているのは否定しないけど。

「それはともかく、呆けてないで出掛けといで。お兄さんは忙しいから」

「お兄さんっていうよりおじさんだろ」

うつさい。

そんなこというとハリセンで頭たたくぞ。

「もう、いいわよ！ 行きましようサイト」

そういつて二人は去っていった。

いや、決して女の子の買い物面倒だとかそういう理由で遠慮した訳じゃないからな？

……… 空しい。

\*

時は過ぎて夕刻。

それまで何してたって？ 魔法の植木鉢を作ってた。

倉庫整理してたら、倉庫に武器防具の種とか魔法の種が大量に出てきたんだ…。

少しは入れてたけど、こんな大量は全く身に覚えがないんだが。

偉大なる元主様、おしえてー？

「ん？ … ああ、まだ我に忠実だった頃に、ガラスの砂漠で狩りまくってたぞ」

「何で？」

「知るか」

命令されてたわけではなかったらしい。

まあ俺だし、多分モンスターがうざくてエインシャントあたりを連発していたのだろう。

…なぜ素直にレポートしなかったんだ？

何にせよ種が大量にあるのは良いことなので、本気で植木鉢を作ってみたのだ。

この世界はマナが多いから楽だわ。  
さてさて、早速何か植えてみよう！

ちゅぼどおおん！！



「な、何だあ!？」

慌てて辺りを見回すと、学院の塔の一つにひびが入っていた!

…あれやったの、ルイズ嬢じゃないよな?

「む、あんな所に小娘の姿が」

「流石、悉く俺の期待を裏切ってくれるな竜帝」

なんてこつたい、流石に怒られるだけじゃ済まんだろうに。

声をかけるか否か…でも面倒事な予感。

すると。

どーん!という効果音がまさしく似合う巨大なゴーレムが出現した!  
…え、どういうこと!?

「泥棒だろう。確かあそこは宝物庫だといっていた」

ちよ、それまずくね?

しかもサイト達何か戦う気だし!

ああもう!

「イビルゲート!」

全てを飲み込む闇の渦がゴーレムを中心に生まれる…が詠唱破棄だ

と流石に全部消すとまで行かないか！

ゴーレムを半分飲み込んだところで効果が切れる。

しかし、それが嘘かのように瞬く間にゴーレムは再生した！

「どうやら土とつながる限り再生できるらしいな」

「面倒な！」

イビルゲートの上位呪文、ダークフォースの詠唱を始めるが、完成する前にゴーレムは何かを持ち去った！  
なんつう逃げ足！

はあ。ダークフォースの詠唱を中断してため息をつく。

「絶対面倒事だ…」

我ながら運がないなあ。

竜帝は面白そうに笑ってるけど。

「いや何、思いの外貴様の慌てる顔が面白くてな」

こんなことなら操り人形にせずに最初から素で協力させればよかった、と一人ごちた。

…畜生、あの時下克上しとけばよかった！

## 盗賊騒ぎ（後書き）

魔法の植木鉢：

種を植えると一瞬でアイテムが手に入る植木鉢。

宿屋に普通に置いてあるので知識があれば作れると捏造。

エインシャント：

無属性魔法。空から隕石を降らせるが、ここでは本物降らせるわけではなく、魔力で生み出した岩を降らせるものとする。

一応本物を降らせることは出来なくもない。

凄まじい破壊力を誇るがその分消費も大きい。何気なくイオの得意魔法である。

イビルゲート：

闇の初級魔法。対象を起点に闇が全てを飲み込む。

ダークフォース：

イビルゲートの上位呪文。対象を闇に引き込み、全方位から攻撃する。

全体攻撃をするとエフェクトが派手になる。

エアスラッシャー：

風の神獣の必殺技。

凶悪な風は沈黙（詠唱不可）状態へ陥らせる。

本来の威力なら中庭が余裕で全壊するが、手加減された模様。

テレポート：

敵の幹部さんだけが使える転移魔法。

因みに、アンジェラも呪文を覚えればできただろう魔法である。転移距離に比例して消費が大きい。

魔法に関しては基本ゲームですが、記憶が曖昧なところがあるんで間違ってたらず指摘して下さい。

イオの年齢が明かされましたが、実は一歳サバ読んでます。死んでる間はカウントにはいるのか微妙ですが。

ちなみにギトー先生はその長い鼻を叩き折ったら面白そうという理由で喧嘩ふっかけられました。  
ここの竜帝フリーダムすぎる。

ギトー先生に祝福あれ。

少し訂正しました。

破壊の杖を取り返せ！（前書き）

フーケ捕縛編。捕縛：編？

破壊の杖を取り返せ！

おっすおらイオ！ … 電波を受信したみたいだ、忘れてくれ。

予想通り面倒事になった。

学院の宝が盗まれたことで、急遽盗賊フーケ討伐隊が編成されたのだ。

その討伐隊のメンバーの中には、ルイズ嬢も入ってる。

我らがご主人、ルイズ嬢が行くんだから当然使い魔も駆り出される訳で、今馬車に揺られる状況となった。

知らんぷりしようかと思ってたけど、イビルゲートをばっちり見られてたもんで行くしかないし。

「…畜生、俺は回復しかやらないからな」

「何でそんなに嫌がつてるんだよ？」

ただの理不尽な反抗心だ。要するに言っただけ。

そりゃあまあ盗みは悪いことだ。

悪いことだけど…教師が討伐隊に参加せず、生徒だけってのに納得がいかない。

見たところタバサとロングビルさんは中々やるようだけど、あとは実戦経験なし。

歴戦の盗賊にこれは酷い。やる気もなくすってもんだ。

「それよりサイト、何で剣を二振り持つてるんだ？」

「あたし達のプレゼントよ！」

ほうほう、モテ男の自慢がこの野郎。

でも…。

「こっちの綺麗な剣、こりゃ飾り用の剣だな。実戦には耐えれないぞ」

「ええ、そんなことないわよ！ 千エキューもしたし、店主だって一杯褒めてたのよ？」

「千エキューがどれだけの価値かは知らないけど、事実だ。少なくとも素人に持たせるようなもんじゃない」

勝手に拝見しといて酷い言い草かもしれないが、事実である。これが使うのがデュランだったらマシだけど…いや、本人の性格上使用わないな。つかキレるな。

これでもう一つも酷いようだったら、サイトは戦力外通告だが、さて。

「やるじゃねえかエルフの兄ちゃん、あっさり剣の質を見抜くなんてよ」

「…喋った！？」

鞘から抜いた瞬間、もう一つの剣が喋り出したのだ！

勝手に動き回る剣なら幾度も見たことあるが、流石に喋る剣なんて初めて見た。

じつと剣を見つめると、何やら魔法が掛かっているのが判る。これが喋る正体か？

しかし。

「これ凄いな…所々錆びててボロいけど、手入れすれば十分使えるレベルだ」

「おうよ、このデルフリンガー様は守るための剣だからな！  
その辺の剣と比べられちゃ困るってもんよ！」

へえ、守りの剣か。

「その心、気に入った！  
と言うわけでサイト、これが終わったらデルフとこっちの剣の手入れな」

人から貰った物は何であれ大切に。  
しかし竜帝退治の時叩き込まれた知識が役に立つとは思わなんだ。

竜帝といえば。

「よくついてきたなー」

ふよふよと浮いている竜帝に問う。  
つか、素直に乗れよ。



「…暇つぶしだ」

ん？ 何か間があったような。

「竜帝、何か隠してないか？」

「…言うほどのことではない」

気のせいだ。そう言って竜帝はそっぽを向いてしまった。

「もうすぐフーケを目撃した廃屋です。気を引き締めて下さい」

ロングビルさんが窘めるように言った。  
すいませーん…。

馬車を降り、鬱蒼とした森を歩く。

暫く歩くと開けた場所にでた。廃屋がある、あれか。  
だが人の気配がない。居るのか、本当に？

「作戦会議」

ちょこん、とタバサが地面に正座した。そして枝を使って絵を描く。

ようやくするところだ。

図兼偵察役が先行、フーケがいれば挑発して外にでたところを集中  
砲火。

いなければ合図、といった具合だ。

で、その図だが…。

「どうして俺を見てるのかなみんな？」

「だって…なあ？」

「紙切れだけでメイジを圧倒した。動きも早い」

「すごい魔法使うし」

「それにエルフなんだからどうにでもなるでしょう？」

まさに集中砲火。ひでえ！

「俺は回復が専門なんだよ！」

「つべこべ言わずに行ってこい」

げしっ！と竜帝に蹴られた。

…覚えてろ、種から良いもの出てもやらないからな！

「つか…やっぱいないじゃん」

小屋を覗いて誰もいないことを確認し、合図する。

みんな恐る恐ると言った具合でやってきた。

タバサは畏がないことを確認し、中へはいる。キュルケ達も続いたが、ルイズ嬢は見張りをすると残った。

ロングビルさんは見回り。

俺も見張り組だが…ルイズ嬢落ち込んでないか？

「どうしたのさ？」

「…何」

「落ち込んでるように見える」

ルイズ嬢はハッと目を見開くと、すぐに俯いた。

「別に落ち込んでないわ。だってフーケを捕まえればお手柄なもの」

「そうか？」

気のせいかな？と、思い直すと、急に影が懸かった。

…ん？

振り向くと、拳を振り上げているゴーレムが目に入った…ってえええええ！

「ルイズ嬢！」

「きゃああああっ！」

間一髪、ルイズ嬢を抱きかかえて離脱。

しかしゴーレムは廃屋の屋根を破壊した模様。竜巻と炎が起こり、直後三人が離脱してきた。

「おおおお、降ろして！」

「あ、忘れてた」

はい、とルイズ嬢を降ろす。軽くてよかったよ。

そうこうしてる間にゴーレムが距離を詰めてきた。すると、ぼんっ！と一部が砕け散った。

背後から聞こえる声で、ルイズ嬢の爆発だと判断する。

「何してんのさ！」

「あいつを捕まえるの！」

そう言っただけでも何度も爆発を繰り返す。けれど少し削れるだけですぐ再生してしまう。

「ルイズ嬢、退くんだ！　ここは俺が何とかするから！」

「それじゃ、あんたに頼りっぱなしじゃない！　私は貴族よ。

魔法を使える者を貴族と呼ぶんじゃない、敵に後ろを見せない者を貴族と呼ぶの！」

そう言っただけで詠唱した呪文を解き放つ　また爆発。

ゴーレムとの距離はもうない！

「ああもうっ！」

再び抱き抱えて回避！

殴られた地面が陥没してる、間一髪だ。

「君、本当に心臓に悪すぎ…」

思いっきり脱力してしまう。

竜帝はげらげら笑ってるし…手伝えよ。

「う…ごめんなさい」

「何にせよ、怪我なくって良かったよ」

タバサの風竜がきたし、あとは任せよう。

しかし、ゴーレムどうやってやつつけようか？

すると、竜帝が目の前に降りてきた。

「小娘の言葉と貴様の脱力ぶりが気に入った。特別に我が木偶の坊をやってやろう」

脱力に着目すんな。つか、聞き違いじゃないよな？

「…貴様も対象に入れてやろうか」

「イエ、結構デス」

そのマナの集まりようはあれだろ、神獣の一撃クラスだろ。そんなもん生身で食らいたくねえよ！

竜帝の周囲に集まった膨大なマナが凝縮される。

「コールドブレイズ」

ゴーレムが、凍りつき砕け散った。  
破片から漏れる冷気が肌を突き刺す。

その場の全員が息を飲んでいた。

…が、これも本来のものより威力が低い…いや、範囲を凝縮したのか？

少なくとも雪だるまにはなっていないし。

「皆さんご無事ですか!？」

「ミス・ロングビル！ フーケはどうでしたか？」

「申し訳ありませんわ。流石名高い盗賊、逃げられてしまいました」

「そう…ですか」

あ、ルイズ嬢また落ち込んでる。

元気づけようとしてか、サイトが明るく告げた。

「破壊の杖は取り戻したんだ！ 大手柄じゃないか！ …こんなもんがこんなところにあるのが謎だけど」

何かぼそつと聞こえたぞ。

かくして、盗賊事件の幕は下りたのだった。

破壊の杖を取り返せ！（後書き）

竜帝はきまぐれ。

まさかのフーケ未捕獲。まあ彼女もエルフが近くにいた時点で微妙に諦めてただろうけど。

精霊魔法>>越えられない壁>>系統魔法なのかな。

原作読んだの数ヶ月前だから忘れてしまった…。

コールドブレイズ：

水の神獣の必殺技。食らった相手を雪だるまにする。

雪だるまかわいいよ雪だるま。

すぐ直るのでついつい放置が多かった記憶が…。

## 不穩の陰（前書き）

武器防具の種、いいですね。

ただ、ムーンフラワーが六回連続で出たときは泣いた。そんなにいらん！



## 不穩の陰

破壊の杖を取り戻した翌朝。

昨日はパーティーということでおいしいご飯を食べれたし、気分は最高だ。

そして今、植木鉢の前にいる。年甲斐もなく、ワクワクが止まらない。

倉庫から武器防具の種を取り出し、そつと植えた。  
むくむくっ！

そして数秒後、あつというまに花を付け、中心から一つの武器を吐き出した！

「おっしゃあああ！」

大成功！

知識はあつてもきちんと作れなきゃ意味ないもんない。

早速創られた武器を手取る。

「おお、流石に軽い」

武器防具の種で創られた武具は、使い勝手がいいんだよな。肝心の種は凶悪なモンスターが持つてゐるから普通は滅多に手に入らないけど。

「何を騒いでいるかと思えば…それはベルティナモールか。武器防具の種を使つたな？」

「だって武器必要じゃん。ハリセンは武器じゃないし」

俺の主武装はフレイルなのだ。

剣なんて素人に毛が生えたぐらいしか使えないし。

それにささやかに楽しんでも良いじゃん！

「思い出すな…貴様の妹はジャツジメンテスで我の鼻面を殴ってきたことを。」

む、腹が立つてきた。おいイオ、殴らせろ」

「理不尽だ!?!」

ごふぁ！

割と本気で殴りやがったな…頭痛…。

「ヒールライト」

優しい光が傷を癒す。

ん、流石俺、もう大丈夫だ。

頭殴るなよ全く。

「…うるさいなあ、何の騒ぎだよ」

テントからもぞもぞとサイトが出てきた。

「おはようサイト、今日も遅いな」

「お前らが早いだけだろ…ふぁ」

まあ、生活習慣だからな。

それより昨日は良かったな、ルイズ嬢と踊れて。

「でも、最初に誘われたのはイオだろ？ 良かったのか断って」

「サイト、良いことを教えよう。…俺はダンスすると、怒られるんだ」

「はあ？」

「いや…きちんとステップ踏んでるはずなのに足を踏んじったりなんてザラで。

妹と弟に特訓して貰ったけど直る見込み一切なし。

妹になんかもう踊るな！と叱られたな…」

酷いゼシャル…兄ちゃんはちゃんと特訓してたのに。  
ヒースも苦笑してたし。

「…苦労してたんだな。つか、兄弟いたんだ」

「可愛い弟妹だ」

ヒースに身長抜かれたときは号泣したが。

ちなみに、俺はサイトよりちょこつと背が低いぐらいだ。ちょこつとだからな。

「…ぶっ」

「…笑うなつか心読むな」

\*

あれから数日後。

今日も今日とて暇だ。

基本、使い魔は主人と一緒に行動するのが常だが、その辺はサイトに任せっ放しな俺らである。

竜帝はふらりとどっかへ行くし、俺も探検と称して空の旅を楽しむことがある。

主教に教わった飛行術がここで役に立つとは思わなんだ。

主教は使いすぎだけだ。

ん、主教の名前？ ノーコメントで。言ったらどんな呪いがくるかわかったもんじゃない。

ふわふわ浮いていたら、何か派手な馬車が遠くに見えた。

結構な上空で見るから距離感が掴めないけど、数時間後に学院にやってくるっぽい？

…あれ、俺やばくね？

学院では付け耳だとかエルフラしくないエルフだとか散々言われているけど、一応なじんである。

だが外となると…最悪、その場で戦争になりかねないかも？

大慌てで学院へ戻る。

そしたら、なんか変な風にめかし込んでるコルベール先生に出会った。

「やあやあイオ君！」

「コルベール先生、おめかししてるけどどうしたんですか？」

「ああ、急にとある尊き方々がやってくることになってね。

ああそつだ、君は出来れば隠れてもらえないかい？ 学院ではもうそれほどではないけど、エルフはあまり印象よくないからね」

尊き方…。王族かなんかか？

どちらにせよ見つければ面倒事は避けられない。

コルベール先生にしっかりと頷く。

さて、どこに隠れよう？

「と言うわけで助けてシルフィ！」

「きゅい！？」

結局、戻ってタバサの風竜、シルフィードのところへ隠れることにした。

…驚かせちゃったかな？

「きゅいきゅい！」

「いだっ！？ ごめん、悪かった、怒らんで！」

べしべししつぽで叩かれた。

出ていけってことっばいが…きゅいきゅいじゃわからん。  
それにしても…。

「シルフィって可愛いな」

いやはや、ドラゴンなのにすごい可愛い。

元の世界のドラゴンには良い思い出があんまりないが、この世界のドラゴン…つかシルフィは好きだ。

つぶらな瞳！ 青い鱗！ 立派な翼！

どこぞの竜帝とは比べものにならん位可愛い。

まああれはどちらかというと格好良い、恐ろしいが先に来るし。…  
そつえば最近本性見てないな？

シルフィの背にもたれて、空を見上げる。諦めたのか、もう抵抗はない。

「……真っ正面から可愛いなんて、照れるのね」

ん？ 誰か喋った？

きよろきよろと見回すが、気のせいかな。

それにしても…眠くなってきた。

「きゅい？」

「ごめん、ちょっと寝かせてー…」

かくんと、意識が沈んでいくのを感じて、俺は眠りについた。  
何故か懐かしさを感じて。

…目が覚めた後、再び面倒事になるとは思わずに。

## 不穩の陰（後書き）

シルフィ好きすぎる。

さて、どうしてイオは懐かしさを感じたのでしょうか。

ベルティナモール

武器防具の種で手に入るフレイル…と云っていいのか不明なぐらい攻撃力の高いフレイル。

一応手に入る中では最弱なのだが、普通の武器とは比べ物にならないほど性能がいい。

ジャッジメンテス：

ブリーストが装備できるフレイル。一応メルティナモールよりは威力が高い。

これらの装備はあくまでモンスター対応で、人に向ける装備ではない。

イオのクラスが謎すぎる…。

設定しといてあれですが、元クレリックレベルじゃないぞ貴様。



拉致られて白の国（前書き）

まさかすぎる人物が登場。

## 拉致られて白の国

突然ですが、拉致られました。竜帝に。

シルフィの体が思ったより寝やすくてついつい爆睡したら、叩き起こされ行くその一言。どう思う？

置き手紙するまもなく、あっという間にテレポート。そしてついたのはどこかの城とおぼしき場所。

…どういう状況だ？

「リュウテイ殿、お待ちしております！ 皇子達がお待ちです」

やってきた文官らしき人にさらに混乱。えっとつまりな。

「状況を説明しろおお！！」

かくかくじかじかで文官さんが話してくれた事によると、ここはアルビオンらしい。

空に浮かぶ白の国で、さらに言うと大絶賛戦争中の国だ。

で、何故俺が呼ばれたのかは知らないらしい、と玉座へ向かうまでに教えて貰った。

今いるのは玉座への扉の前だ。

白く美しく、荘厳な扉を竜帝は遠慮なく開いた。

「連れてきてやったぞウェールズ」

「ああ、ありがとうリユウテイ殿。しかし彼は…本当にエルフじゃないか？」

そう言っただけ現れたのは金髪の整った顔立ちの、いかにも王子様といった風貌の青年だった。

当然だが警戒されている。

「…どうも、昼寝してたら拉致られましたハーフエルフのイオです」

「ハーフっ!？」

何か水をふっかけたような騒ぎになった。

ルイズ嬢の反応もこんな感じだったな、懐かしい。

「静粛に！ 王の前ぞ！」

宰相らしき人の一声で玉座の間は静まり返った。

ただ、睨みつけるような視線じゃないが、何か粘っこい視線がくるのはちょっと…。

居たたまれなくなって竜帝に視線を向ける。

「竜帝、いきなり拉致って何の用だよ本当に」

「すみません、イオ先生。俺が無理を言ったんだ」

っ！？ この声！

慌てて声のしたほうへ振り返ると、真っ赤なマントが目に入った。  
紅蓮の炎のような赤色。

それを身に付けてるのは。

「紅蓮の魔導師！？」

「久しぶりですイオ先生」

かつてアルテナ最強と謳われた紅蓮の魔導師その人だった。

だが彼はデュランとの決着をつけて自爆して死亡した筈だ。どうしてこんなところに…まさか！

「紅蓮さんも光の帯を通ってきたのか？」

「いえ、何もない空間を漂っていたら引っ張られて…ここにいるウ  
エールズ皇太子達に救われました」

そういつて紅蓮さんはばつが悪そうに俯いた。

「…あの日は本当にすみませんでした」

「あの日？ …ああ」

食われた日か。とは口に出さなかった。

「そりゃあ何で俺が、とは思ったけど気にしてないよ。気にする暇もなかったし」

主に隣にいるドラゴンのせいだ。

まあ結果的に生き返れたし、何より紅蓮さんが元に戻っていて嬉しいな。

最後に見たのは人形みたいな無表情だったし。

「それで、ここに呼んだ理由は何？ 確かこの国は戦争中だったと思うんだが」

「そうだ、戦争だ」

心底楽しそうに竜帝が言った。

…まさか。

「戦争に参加させる気か？」

「いや、紅蓮の魔導師を見つけたので会わせてやろうと思ったただだ」

「竜帝様が城に乗り込んできたときは何事かと思いましたが…」

がくっ！

いや、戦争に参加しろじゃなくて良かったけど！

つーか何してるんだ竜帝ええ！

「じゃあ何で俺を呼ぶのにこんなに仰々しいんだよ…」

「紅蓮の魔導師殿には世話になりっぱなしでね。私も王も魔導師殿

の師となるとご無礼できないんだよ」

「…紅蓮さんこの国で何したのさ。つか俺は師匠じゃない」

「取り合えずマシンゴーレムを試作したり、反乱軍を蹴散らしたりなどを」

そう言えば紅蓮さんフォルセナ城陥落寸前にしたんだっけ…。

どこか遠い目をして紅蓮さんの話を聞く。

周囲の方々も口々に言う。

「あのゴーレムはすごい！ たかがゴーレムと侮っていた反乱軍をあつと言う間に蹴散らしましてな！」

「魔導師殿も我々が見たこともない魔法で反乱軍を一掃したり、大活躍でした！」

べた褒めである。

…紅蓮さん、ちょっと戦争終わったらじっくり話し合おうか。

「もうひと頑張りすれば反乱軍を鎮圧出来る、と言ったところで竜帝様に再会しまして。

イオ先生も一緒にいるということで、つい竜帝様に頼んでしまいました」

「…もう何も言わんよ」

頭が痛い…。紅蓮さんってこんな性格だったか？

レポート使って帰ろうかと思うと、にっこり良い笑顔の皇太子が

そこにいた。

「是非ともおもてなしをしたいんだ。泊まっていくと良い」

「…あの、俺ハーフエルフなんですよ？ 半分は貴方達の嫌いなエルフ」

「紅蓮の魔導師殿の師匠なんだ。悪い人であるわけがないよ」

だから師匠じゃないんです。

ちよつと精霊を訪ねて力の使い方を教えてあげただけなんですけど！

「それに、貴公の話はかねがね聞いている。ああ、勿論魔導師殿からね。それに」

異世界の者だと言うこともばっちりね、と囁かれた。…紅蓮さんどこまで話してるのさ。

結局異世界の王族に対する拒否権はなく、なし崩しに王城に泊まることになってしまった。

帰ったら怒られるよな…はあ。

翌朝。

いつも通りほぼ日の出に起きた俺はいつも通りお祈りをする。女神様、今日こそは帰れますように。

ルイズ嬢達のお怒りが怖い。

やること特にないし散歩でもするか？

と、考えていたらいきなり竜帝がやってきた。テレポートすんな心

臓に悪い！

「ふっふっふ。散歩と称して外へ行く気だろう？」

バレてーら…。しかし、早起き珍しいな。

「ん？ 少々熱が入ってな、敵の飛行船を落としていたら朝になつてただけだ。」

戦争満喫してやがる。

敵さんご愁傷様ー…冥福を祈るところ。

つて、おかしくないか？

「時間掛かりすぎじゃん。本来の姿ならそれこそ一瞬で終わるんじゃない」

「…言つてなかったな。何故か戻れんのだ」

え？

「嘘だろ。竜帝サマがドラゴンに戻れないなんて」

「笑えない冗談だが、事実だ。…今は力が制限されている」

このルーンのせいかな？と竜帝はつぶやいていたが俺にはそんな兆候全くない。

マナだって最高に満ちてるし、むしろ死ぬ前よりも調子がいいぐら이다。



けれど竜帝の体には制限が掛かってる…謎だ。

朝食に呼ばれるまで竜帝の体を診たが特に異常はなかった。  
どういふことなんだろう？

## 拉致られて白の国（後書き）

というわけで紅蓮さん（本名不詳）登場。これでパーティ組めますね！

紅蓮さんも性格捏造。敬意を払うのは恩人と上司と師匠のみで、基本はゲームの高慢ちきではありますが。

紅蓮さんのステータスもほぼボス戦と同じ。

よく考えたら…こいつら近接担当いねええええ！

マシンゴーレム：

アルテナが誇る魔導兵器。紅蓮さんは知識だけ持つてて自分では作れないという設定。

土メイジが部品を組み上げ何とか旧スペック（HOMぐらい）レベルまで汲み上げた。

操縦者いらず、単体でかなりの広範囲を攻撃できる上頑丈。

因みに紅蓮さんは単体で攻城戦ができる（主人公がデュランの場合参照）

紅蓮さんは大砲、竜帝はただのラスボス、イオはバランス兼回復役というパーティ。あれ一名おかしい。

紅蓮さんがあそこまで信頼されている経緯はまた次回。

追記しました。

## 紅蓮の道程（前書き）

今回は紅蓮さんの昔話。タイトル変えました。

## 紅蓮の道程

私は夢を見ているのだろうか。

かつて圧倒したはずの傭兵は、私が師と仰ぐ人を打倒してきた。そして、今私さえも圧倒している。

その事実になかならず動揺している私がいた。

どうして負ける！？

師を生け贄にした日に私は絶対の力を手に入れたのだ！  
女王にも、王女にも負けない圧倒的な力を！

（ これで私達、もう馬鹿にされないわね！ ）

王女の声が脳裏に甦る。

… いった話だったかな。 もう一年は前の話か。

ずっと懂れていた魔法の力を、精霊の補助で発現できた日だったか。

王女の身に宿る力は莫大で、私はちっぽけな存在だったのを思い知らされたな。

竜帝様の誘いに迷わず乗ったのはそのせいだったと思う。

… ああ、もう記憶はこんなにも曖昧か。

蘇った師と違い生身の私は回復手段さえ持たない。

回復はできない。だがあの傭兵はとどめを刺そうともしない。

いつそ恐ろしいほどのまっすぐな目で私を見つめていただけた。

勝者の情けか。だがそんなものはいらない。

戦えないのなら、私にもう価値はない。

小さく、小さく呪文を唱える。あの傭兵が気づいた瞬間、呪文が発動し私の体は爆炎に包まれる。

ざまあみろ。貴様などに情は貰わん。

そう思ったのが最後、私の意識は完全に途切れた。

それから幾時が過ぎたのだろう。

何も感じなかった意識が突然戻ってきた。

どこを見ても何もない空間で、ただひたすら漂っていたらしい。

らしいというのは、戻ってきたとはいえ未だに意識があやふやだからだ。

主とあの傭兵達はとうなったのだろう。

ただ判っているのはこの空間に終わりがなくことぐらいだ。

私はこのままここを漂い続けるのだろうか。

師匠もここにいるのだろうか。

ぼんやりと考えていると、急に何かに引つ張られた。

何だ、と考える暇もなく引きずりこまれ、地面にたたきつけられる！

「ぐあっ！」

相当の高さから叩きつけられたようだ。

痛い　と考えると違和感を覚えた。

私は死んだはずだ。肉体の感覚があるはずがない。

だが現実として叩きつけられた身体は痛みを訴えている。

回復魔法を、と考えたが自分には使えなかったのを思い出した。身内で使えるのは師ぐらいだか、都合よく居るはずもなく。

（こんな訳の分からない状況でまた死ぬのか！？）

死んでたまるか、と歯を食いしばったとき。

「　大丈夫か？」

救いの手は、現れた。

アルビオン王国皇太子、ウェールズ殿下とその配下だった。

彼らは親切にも傷つき倒れていた私を手当すると、王城へ連れて行った。

そこで交わした会話で、私は異世界に来たことを認識させられた。

レコン・キスタとやらの兵だと思われていたことも判ったのだが  
それは割愛しておく。

異世界など来たことがないからどうすればいいのか判らなかったが、  
幸いこの世界も魔法があつた。

とにかく身分の保障を求め、魔法の実力を認めさせ、さらにマシン  
ゴーレムの設計図も起こした。  
内乱中だというこの国で、信頼を得るため一兵卒として戦争にも加  
わった。

竜帝様に賜ったこの力は異世界に来て衰えはなく、ただの人間な  
ど塵のように吹き飛ばした。

…神官だった師匠が見れば怒られるだろうが、生きるためだ、後悔  
などない。

最初は疑念しか向けられなかった目も、少しずつ信頼と畏怖を交え  
るようになった。

毎日が充実していたと自信を持っていえる。

気がつけばウェールズ皇太子とは、異世界出身であるということ  
明かす仲にまでなっていた。

最初は王家に身分を保障して貰うだけのつもりだったのにな。

そして内乱はほとんど鎮圧し、あとは仕上げばかりになった。

そんな折だった。

「む、紅蓮の魔導師か？」

「竜帝様！？」

ニユーカッスル城へ現れた不遜の輩。

それを退治するために赴いたとき、そこにいたのは我が主竜帝様だった。

主は退屈しのぎにやってきたと言った。

遙か遠いトリステインには師匠もいるらしい。

なんという巡り合わせか。

初めて女神に感謝したかもしれない。

主は本当に退屈しのぎでやってきたらしく、私がこの城を守っていることを伝えると、つまらなそうに攻撃をやめてくれた。

代わりに内乱中であり、アルビオンの周りには敵しかいないことを伝えると、主は愉しげに協力してくれると仰られた。

そして国王達に主の紹介を済ませ、数日が過ぎた頃。

主は急に師匠を連れてきた。

私が以前こぼしたことを覚えていて下さったらしい。

数ヶ月ぶりに出会った師匠は生前のままだった。彼も甦ったらしい。

「お久しぶりです、先生」

師匠は『師匠』と呼ばれるのを非常にいやがっていたのを覚えてい



たので、妥協する。

師を怒らせれば怪しげな薬の実験台にされかねないからな。

久しぶりに会った師匠は、あの一年間のことを微妙にしか覚えてないらしかった。

師匠が主に甦らされた直後の苦い記憶を掘り返されずに済みそうだな良かった。

：今だから思うが、あのときの自分は本当に調子に乗っていたしな。師匠に徹底的に叩きのめされていなければ、あの忌々しい勇者共に瞬殺されていたぐらいに傲慢だった。本当に良い師匠を持った。

ただ、幾ら自分が力を得るためとはいえ、師匠を生け贄にしたことは後悔していた。

以前、そのことを謝る機会は全くなく（師が自我を取り戻した直後ウエンドルへ行ってしまったこともあって）それだけが棘のように突き刺さっていた。

だが、それも今日で晴れた。

師匠たちは王子の勧めで泊まることになったし、話をたくさんしたい。

：どこことなくいやな予感もするが、ささやかながら宴の準備もしてもらおう。

そう言えば師匠は下戸だったような。

ジュースもあればいいが。

## 紅蓮の道程（後書き）

紅蓮さんがここに來た経緯を大ざっぱに綴ってみました。  
相変わらずの性格捏造。

紅蓮さんのやったこと：

- ・マシンゴーレムの設計図を描く
- ・戦場でレコン・キスタを叩きのめす
- ・ウェールズ皇太子の恋の悩みを聞くe t c .

因みに、紅蓮さんとイオががちでやり合うとイオが圧勝します。  
回復・補助魔法というアドバンテージは偉大。

**本領発揮！（前書き）**

今回さらっと残酷かも。

本領発揮！

イオだ！

朝食を食べた後も竜帝の身体を診たけど、原因不明すぎる。一応あらゆる呪術修めてるんだけど、どうしようもない。

紅蓮さんはすでに知ってたらしい。

この手の専門家の俺に何故聞かなかったと突っ込みを入れたいが、紅蓮さんは竜帝至上主義なのでどうせ聞いてくれないだろう。昨日の説教だけじゃ足らなかったか…。

紅蓮さんにどうやって説教をしようかと考えてると、ウェールズ皇太子に声をかけられた。

「イオ殿、少し頼みがある。貴公は優秀な治癒術士ときいてる。此度の戦争で傷ついた者を手当てしてやってくれないか？」

「ん？ ああ、いいですよ」

忘れるところだったが戦時中だったな。しかし王族が使い走りってどうなんだろう？

皇太子に案内され、救護室っぽい部屋へ辿り着く。予想していたより怪我人が少ない。

「これだけですか？」

「ああ、紅蓮さんのおかげで随分楽になってね。彼には感謝しても

しきれない」

下手すると王国軍は敗北していたからね、と皇太子は呟いた。  
よほど苦しい戦況だったのだろう。

応急手当の上にしつかりした処置をしつつ、皇太子の話を聞く。

今日の戦いで決着が付くかもしれないらしい。

昼頃出陣で、皇太子は緊張を解すために俺をここに案内したらしかった。

ヒールライトと薬を併用する手当を、皇太子は興味深そうに見ていた。

「私達の魔法で言えば、治癒は水メイジが専門なのだが、そちらは光なのかい？」

「昔はヒールウォーターってのもあったらしいですよ。ただ、今は回復と言えば光が主流ですかね」

「ほう。紅蓮さんは攻撃的な魔法しか使えないようだったけど、他にもあるのかい？」

「ありますよー」。

俺たちの魔法は八属性あって、素質があれば個人の波長にあう属性が使える。

例えば俺は、地水火風とはあまり相性がよくない。

使えるのは精々セイバー魔法ぐらいだが、光と闇に関してはその逆に吸収してしまうぐらい相性がいい。

月と木もまあ相性は良い方だ。この二つは補助的な面が多いけど。

簡単な説明をすると、皇太子はさらに目を輝かせた。

「素質があれば誰でも使えるのか。では私にも使えないかな？」

「どうでしょうね？　精霊達がいれば教えてくれるんですが…」

八精霊はもういない。マナが消えると同時に消えてしまった。

だから精霊魔法が使えるかなんて　あれ？　おかしくないか？

精霊がないなら何で魔法が使えるんだ？

確かに最終決戦でデュラン達は魔法を使った。だがあれとは状況が違いすぎる。

…恐ろしい考えが過ぎった。『マナ』とは何だ？

身近にあつて当然だと思っていたのに、今は酷く得体が知れなく、恐ろしい。

「イオ殿？」

「…っ！　少し考え事をしていました」

今は深く考えないどころ。

柄にもないが、怖い。

何も考えないように、治療に集中しよう。

その甲斐あってか、負傷者は幾分か戦線に復帰出来るようになったが、心は晴れなかった。

はあ。

こう、頭使つの苦手なんだよな。

なんかこう、すかつとしたいんだけど……そうだ！

「皇太子殿下、お願いがあります」

というわけで、紅蓮さんの護衛をすることになった！

え？ 何がというわけであって……暴れるためだ！ 殺しはしないつもりだけど。

フードを被って意気込んでいると、紅蓮さんが心配そうに見ている。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫さ！ それより怪我するなよ、治すの面倒なんだからな」

軽い調子で言っていると、紅蓮さんは誰に言ってるんですか、と毒づいた。

今回の作戦は単純だ。レコン・キスタの頭領が籠城しているどっかの町だったかを、地域住民の安全を確保しつつ取り押さえる。

だが住民は基本退避済みだ。故に暴れることに関しては余り問題が

ない。

突入部隊としてマシンゴーレムを使い、メイジが追い打ちをかけて一気に落とす。これが作戦の全貌だ。

航空戦力は竜帝が根こそぎ刈り取ってるからな、連中は逃げれない。

紅蓮さんはマシンゴーレムの全体指揮だ。

で、俺は万一接近されたときの護衛扱いして貰ってる。万が一もないと思うが。

「マシンゴーレム、突入！」

紅蓮さんのかけ声とともに、今までゆっくりだったマシンゴーレム達が城へ突入する。

それからは一方的な展開だ。

ロケットパンチやら電撃やらが飛び交って、あっと言う間にメイジ達を蹂躪していく。

思わず眉をひそめたが、戦争だ仕方ない。冥福を祈ろう。

ゴーレム達によって軍はあっと言う間に進軍し、実にあっけなく城を包囲した。

…あれ、俺出番なくね？

「行くぞ！　今こそ我々の手で反逆者どもを討ち取るのだ！」



「「おおーッ！！！」」

ウェールズ皇太子のかけ声で一気に突入。本気で俺いらないな！？  
そのまま制圧かと思われたが、そこで歯車が狂った。

「なっ、マシンゴーレムが！？」

城に突入したマシンゴーレム達が予先を変えたのだ！  
その凶弾は最前線にいた俺たちに集中する！

「イビルゲートっ！」

とつさに闇を生み出し、攻撃を吸収する。

「どうなってる？ まるで魅了でも掛かったみたいだ！」

「その可能性が高いです！ マシンゴーレムは設計上、味方に攻撃  
するのはあり得ません！」

そう言って紅蓮さんは敵となったマシンゴーレムを焼き払う。  
後ろの軍はシールドを張って堪えてるが、いつまで持つか怪しい。  
しょうがない！

紅蓮さんも同じことを考えたようだった。

「エインシャントで一掃するか」

「ですね。ゴーレムは作り直せばいい！」

ちよいと気が引けるが、エインシャントを同時詠唱する。

一重二重と重なる詠唱を止めようとマシンゴーレム達がやってくるが、残ったゴーレム達で時間稼ぎをする。

だが俺たちの高速詠唱を邪魔するには程遠いっ！  
呪文が完成する！

「星よ来たりて敵を討て！ エインシャント！！」

古代語呪文のエインシャントは、相乗効果を持ってして、凶悪と言つていい威力でゴーレム達を葬り去る！

…対象をゴーレム達に絞ってなきゃこの辺一帯が更地になってたな。

とにかく、ゴーレムの脅威は去った！

けど、マシンゴーレムに黙祷。オーバーキルすぎたな、跡形もないし。

城内制圧はスリープフラワーにしよう、うん。

しかし、さっきのゴーレムの反乱は一体どうしたことなんだろう？

数刻後。

皇太子に進言して、制圧作戦はスリープフラワーを使うことになった。

こつちにもスリープクラウドというのがあるらしいが、使い手が余りないらしい。

俺の使ったスリープフラワーは風メイジの力を借り、城内へ眠りの

花粉を撒き散らした。

最初から使えって？

アルビオンは風が強いから対象を定めてても味方に被害がくるんだよ！

進軍途中で一人でも寝こけて見ろ、ドミノ倒しだ。王国軍っていうのは妙に綺麗に隊列つくるからなあ。

とりあえず、寝こけてる兵士達を縛りながら進んでいく。

卑怯？ 気にするな！

頭領さんはどこかねえ？

きよろきよろと適当な部屋を覗いてみる、

「っ！」

とっさに首を傾げると、風の刃が真横を通った。  
寝ていない奴が居たのか！

持っていたメルティナモールをとっさに振るう。

がごんっ！

ちよっと人体の奏でる音じゃないぞ！？

しかしメルティナモールにぶちあたったメイジは一瞬で床に崩れ落ち  
立ち上がった！

「なっ！」

ゾンビか何かか！？

しかし今は真っ昼間な上、闇の力など微塵も感じない。ゾンビな訳がない！

しかしゾンビもどきはメルティナモールをがっしり掴む。  
仕方ないので肘鉄を食らわし、ぶっ飛ばす。

だが活動を止められるほどではないか…。一応試すか。

「ターンアンデッド」

手の平を向け聖なる波動を解き放つ。

アンデッドなら一撃で昇天可能な魔法だが…どうだ？

ゾンビもどきはまるで糸が切れたかのように倒れた。一応効くらしい。

体を調べたがやはり死体だった。くそ、冒涇だ。頭領は頭いかれてんのか！

あんなのが他にいたら面倒だ。さっさと頭領見つけてふん縛ろう。

「紅蓮さん！　ここ任せたぞ！」

言い逃げして無人の廊下を突き進む！

悲鳴や怒号が聞こえる。他の所もずいぶん苦戦しているらしい。まあ紅蓮さんがいるし、よっぽど大丈夫だろうが。

取りあえずもどきを見かけてはターンアンデッドを繰り返し、昇天させる。

何というか…作業だ。後でちゃんと弔おう。

随分高い階までやってきたと思うが、頭領っぽいものいな。逃げたか？

ガシャーン！！

近くでガラスの割れる音がした。

そこか！？

フードを押さえつけながらも必死で走り、扉を蹴り破る！

だがそこには血塗れの男性が一人、倒れていただけだった。

慌て脈を確かめたが 死んでる。酷いな、首を一掻きか。

大方同士討ちか？ 何にせよ胸くそ悪い。

やがてウェールズ皇太子による勝利が宣言され、レコン・キスタは壊滅した。

だが何だろう、この不安は？ いやな予感がするな…。

## 本領発揮！（後書き）

いろいろと酷いレコン・キスタ打倒編。中ボスの力の片鱗がここに！

対象云々について：

ゲームでよくあるあれです。基本的に狙いはつくけど、周囲の影響が余りに強いと狙いがそれるという設定。

特にスリープフラワーはマップ全体に眠りの花粉によく似た魔力をばらまく魔法と考えており、耐性があるうとなかろうと眠ってしまう設定。

一応対象設定はできますが、三人パーティのような少人数はともかく、軍のような大勢で攻める時の魔法としては不適切かと。

気心のしれた三人パーティの連携ぐらいなければ完全に回避することとは不可能。

さらに範囲広げすぎると威力も落ちるので、城みたいな密閉された空間じゃないと効果のほどは期待できない設定もしています。

逆にエインシャントみたいな降下魔法は、あくまで降らせる魔法なので対象設定がしやすい設定です。威力は範囲によって変動、しかし魔力消費を大きくすれば威力そのままに範囲をある程度広げられると捏造。

今回捏造多いな！

スリープフラワー：

木属性の眠りの魔法。眠りの花に非常によく似た魔力を流し、相手を眠らせる。人形だろつと何だろつと関係なく、意志ある者に眠気を誘う。

魔法耐性の強いものなら拒むことができる。

原作ではマシンゴーレムさえ眠らせる魔法ですね。ほんと、お世話になりましたorz

ターンアンデッド：

名の通りアンデッド殲滅魔法。魂を冥界へ送り返す。

高位の神官なら習得できる。

今回さらっと残酷描写がありました、大丈夫でしたか？

しかしアントバリの指輪の効果（死者を蘇らせる）に対してはターンアンデッドよりアンティマジックの方が良かったかな…。

曖昧な判断ですいません。

戦争終了と結婚式！？（前書き）

アルビオンから帰還。

今ならセットで紅蓮さんもついてきます。



## 戦争終了と結婚式！？

護衛という名目で参加した戦争は、非常に少ない被害で終結した。途中から護衛放棄したけど！

そういえば、血塗れで倒れていた男、どうやらアレが頭領だったらしい。

元プリミル教の司祭だったという。皇太子は色々愚痴愚痴言ってたが、とりあえず器が小さい男だったのは判った。

でも何で殺されたんだろ？

そんなことをボーっと考えていると、突然耳を掴まれた。そして引つ張られる！って待て！？

「あだだだ！？」

「何やら随分悩んでるではないか、イオ」

痛い痛い！ 耳とれる！

どうにかして竜帝の手をはがそうとしても、びくともしない。畜生。

「いい加減に…しろっ！」

「む」

メルティナモールを振るうと、流石に竜帝も逃げた。ふう、助かった。

でも痛かったから睨んでやる。

「何してるんですかお二方…」

紅蓮さんも呆れ顔だ。

俺は悪くないぞ、竜帝が悪いんだからな！

じつと睨んでやったが大した効果はなく、竜帝は欠伸しだす始末。  
おい、反省しろ。

そこまで考えると、不意に竜帝の手に目がいった。手というか、正確には指先の指輪。あんなのしてたっけ？

「竜帝、その指輪どうしたんだ？」

「その辺の人形から拾った。なかなかの力を秘めていたのだな」

そう言って面白そうに指輪に目を向けた。

…碌な事にならんといいが。

あ、そうだ。

「紅蓮さん、そろそろ俺達帰るよ。向こうに心配かけてるだろうし

…」

濃い数日だったなあ。もう何ヶ月か経ったかと思ったよ。

「なら私も行きます」

…ん？

耳が遠くなっただかな…。

「本気ですよ？ 重要な案件の時には戻ってきてくれと言う殿下の了承も得てます」

「脅したろ」

「よくお分かりで」

ダメだこいつ、すでに手遅れだ…。

大体どうやって連絡取るきなんだ、テレポートか？

世話になった人々に挨拶をして、エントランスまで見送られる。

「テレポートなんて見送らなくてもいいのに…」

「何、形だけでもという奴さ。また遊びに来てくれ、歓迎する」

そう言つて皇太子は爽やかに微笑んだ。

そうですね、いつかかならず。

ペコツと礼をして、テレポートを発動した。

景色が変わった。白い城壁から緑溢れる森の中だ。

近くにはテントがあるし、間違いなくトリステイン魔法学院だ。

懐かしいなあ、そんなに離れてた訳じゃないんだが。

「…………イオ？」

お、この声は。  
振り向くと予想通り、黒髪の少年 サイトがいた。  
でもなんか様子がおかしい。

「…ただいま？」

「イオだああああ!!」

勢いよくぎゅうつつと抱きつかれた!

ちょ!?! 俺にそんな趣味はないぞサイト!

ってあああ! 紅蓮さん呪文詠唱始めるな!

エクスプロードって生身の人間に向けるもんじゃないから!

とっさに倉庫から適当に何かを投げつける。

ずごん!とはちみつドリンクのビンが命中して、紅蓮さんは昏倒した。

…死んでないよな?

ぴくぴく動いてるから大丈夫でしょう。…流石に後で治療するか。

「で、どうしたよサイト」

「ルイズが髭といちゃこらしててえ…髭はバカにした目で見てくるし、ひつく、俺なんて俺なんてえ…!」

おっけ、判った。酔ってんなこの野郎。  
でも髭ってなんだ?

酔っぱらいほど面倒な者はない。相変わらず抱きつかれたままで鬱陶しいので、スリープフラワーを使う。

当然ながらサイトはあっさりと意識を失った。しかし…。

「髭ってなんだろうな？」

「知るか」

サイトを地面においといて、紅蓮さんの治療に取り掛かる。でっかいたんこぶになってた。…後で謝ろう。

さて、サイトと紅蓮さんをテントに置いて散策しよう。

え、サイト危険？ 紅蓮さんを「沈黙」させたから問題ない！簡単に言くと、俺達が戻るまで詠唱どころか魔法の発動さえ出来ない呪いをかけてやった。置き手紙はおいといたので大丈夫だろ。

まずはルイズ嬢探さないとな。

「シエスター、ちょっといい？」

「あれ、イオさんじゃないですか。お久しぶりですね、今までどこへ？」

「ちょっとアルビオンへ。それよりさ、サイトが落ち込んでるんだけど何かあった？」

尋ねると、シエスタはちょっと困った感じで周囲を見回した。

「実は、先日王女殿下が学院を訪れまして」

コルベール先生がめかし込んでた日か。

シエスタの話を聞く限り、別に王女殿下が話の焦点ではないらしい。

魔法衛士隊隊長、ワルド。ルイズの婚約者だとか。

曰く金の髭が眩しい美丈夫だそうだ。髭ってそれか。

「つまりサイトは失恋か？」

「多分…」

シエスタ複雑そうだなあ。

何せこの黒髪の少女はサイトに惚れているのだ。

当の本人はルイズ嬢に自覚なしの恋してるっぽいし…やれやれ。

「人間は面倒だな」

「半分エルフとしては同意するけど、そういつてやんな。人間ってのは面倒くさい生き物なんだよ」

俺みたいな半端者が何を言っかって話だけど、人間はそんなもんだ。

「大体判った。じゃあルイズ嬢知らない？」

「ミス・ヴァリエールなら多分応接室です。ミスタ・ワルドとお話があるようでしたから」

へ？

つまり、ワルドさんまだいるの？

「何でも、婚約について話があるって暇を貰ったらいいですけど」

あの人嫌いです、とシエスタは小さく呟いた。

シエスタが嫌うってことはよっぽどなんだろうな…一応警戒しとくか。

「仕事中に悪かったな」

「いえいえ、私も少しすつきりしました」

じゃ、とシエスタと別れる。

しかし弱ったなあ。ルイズ嬢とはまだ話せないだろうし、サイトとうしよう？

「つくづく人間は謎だな。欲しい物があれば力尽くで奪い取ればいいものを」

「力尽くで手に入れないものだってあるんだよ」

そう言うのと竜帝は度し難い、と眉を顰めた。

「いつか理解出来るんじゃないか？ 今のお前なら」

クオン大陸の大邪竜ではなくただの竜帝なら。

…ただの竜帝ってなんかおかしいな。今度真名あるか聞いてみよう。

「理解できる日など来なくても困らん」

「素直じゃないな！」

そう言つて笑つたらぼかつと殴られた。  
ホントに素直じゃない。

笑いをこらえながらテントへ戻ると、すごく不機嫌な紅蓮さんと、  
突っ伏してるサイトがいた。  
…どういふ状況？

取り合えず紅蓮さんの呪いを解いて話を聞く。

「何があつた？」

「…ピンク髪の少女が来て、自分が結婚する事を伝えられたらいきなり崩れ落ちただけです」

…とどめ刺されたか。

つて結婚！？



戦争終了と結婚式！？（後書き）

まさかの結婚フラグが残っていた。

ここのルイズ達はアルビオンへ行ってます。何故ならアルビオンの勝利はほぼ確実で、わざわざ手紙を取りに行く方が危険なので。ですがサイトはワルドにぼこられたあとだったり。

因みに、このあと紅蓮さんは上司達のテント暮らしを知り、呆然とします。

流石に男四人でテント暮らしは如何なものかと考えたイオが予備のテントを出したりもします。でも結局テント。

テント暮らしなんてしたことないだろう紅蓮さんは大丈夫だろうか。

## ラドゲリアン湖の精霊（前書き）

タイトルの通りです。

## ラドグリアン湖の精霊

落ち着け俺。こういう時は素数を数えるんだ…って現実逃避してる場合じゃねえええ！

数日アルビオンにいつてたらご主人様が結婚。どついう展開だホントに！

「…先生、大丈夫ですか？」

「無理」

サイトじゃないけど凹みたいよ…。

あれだ、妹が嫁に行く気分？ 笑えねえ。

シャルが嫁行くとときもこんな感じなのかもな…。……。

認めるかああああ！！

「…竜帝様、また洗脳か何かを？」

「しとらんぞ紅蓮の魔導師。あれは素だ」

外野が何か言ってるけどスルー！  
未だ嘗てなく腸が煮えくり返る…！ ヒースが相手だろうと認めないからなシャルー！

…って落ち着け。今の問題はシャルじゃなくてルイズ嬢だ。

まずは問題の把握だ。話はそれからだ。

「というわけで教えてデルフ！」

「おう？ 帰ってたのかエルフの兄ちゃん」

凹みまくってるサイトからデルフリンガーを拝借。  
本人まだ凹んでるしいいよな。

「ああ、あの娘っ子の事かあ。意地だよ意地」

「意地い？」

「そ。婚約者にプロポーズされて、相棒が嫉妬してたのにも関わらず突っぱねちゃってなあ。

あの気の強さだろ？ 謝れずにまた突っぱねてプロポーズを受け  
ちまったんだ」

「…成る程」

結婚って人生の一大事だろ、そう簡単に決めちゃっていいんかねえ？  
しかし呆れた。

ルイズ嬢もだが、そこなヘタレもどうして想い合ってることに気づかないかな。

「ん、ありがとうデルフ。あとで磨いてやるよ」

「ありがてえ。相棒は手入れド下手どころか、やってくれすらしね

えからな」

デルフを丁寧な鞆へ戻して背負う。サイト丸まってるし。さて、当面の問題はサイトか。

だって人様の結婚式なんてそう簡単にぶち壊せるもんじゃないし。いや、普通は壊さないもんだけど。

「何だ、壊さんのか」

「だから心読むなよ、つか残念そうにしてるんじゃない」

「…あの、話が見えないんですが」

あー、紅蓮さんは知らないもんな。

竜帝説明よろしく。俺はサイトにお説教してくるから。面倒な訳じゃないぞ！

「む、待てイオ！」

「待たない！」

サイトの襟首掴んで適当にテレポート！

一瞬で景色が森から湖へ切り替わる…っておい！？

「適当にしすぎた！？」

やっちまったああああ！

浮遊術を使う前に湖にどぼん！と落ちる俺たち。

「な、なんだあ！？」

サイトも正気に戻ったみたいだけどそれどころじゃない！

俺泳げないんだよ！

情けないと言っな！

ウエンデルは内陸、ミラージュパレスは論外、どこで練習しろと！

つか…やばい、デルフ背負ってるせいかもしれんが、だんだん沈んでく…。

「イオ、しっかりしろ！」

サイトの声が遠い。

苦しい…！

もうだめか…短い蘇りの日々だったな…。

『イオはん！』

ぐいつと身体が引つ張られた。

不思議なことに先ほどまでの苦しさが無い。

『しっかりしてえな！』

「イオ！」

「…サイト？ それに、もう一人…」

『うちやうち！』

ぱしゃん、と水が弾け、チカラが集まる。

チカラは青い泡をなし、小さな人魚の姿を形作った。

「ウンディーネ…！？」

「正解や！ 今はうちのチカラで二人を押しとるさかいな、陸までもう少しやで！」

何で、どうして。

あまりに唐突な展開についていけない。

水の流れに乘せられて、無事に陸にたどり着くと、ウンディーネは人好きのする笑顔で笑った。

「助かってよかったわ」

「ありがとう、助かったぜ。…でもお前何なんだ？」

「うちは水の精霊や！」

そう言つてウンディーネはふふん、と小さな胸を張った。

…あー、悪かった、悪かったからその三叉の槍引っ込めてください。

「でも何でウンディーネがここにいるんだ？ …まさか八精霊全員いるんじゃない」

「うちにも判らん。気がいたらここにいたんよ。他のみんなの居場所もわからへんし…」

「…あー、知り合い？」

「「うん」」

サイトの問いに迷うことなく頷く。

「けど、なんでラドグリアン湖のど真ん中に落ちてきたん？」

「あはは、適当にテレポートしたら失敗しちゃって…」

いやあ懐かしいこの感じ。つかここラドグリアン湖っていつのか。…って和んでる場合じゃない！ ルイズ嬢の結婚問題、どうしよ…。

表情に出てしまったのだろう。ウンディーネが心配そうにのぞき込んできた。

「お困りかいな？」

「…まあ、困り事っちゃあ困り事なんだけど」

そうだ、ウンディーネに相談してみよう。

かくかくしかじかでこういうことなんだけど…。

「…取り合えずそっちのあんさんがヘタレなのは理解したわ」

「ぐふぉ！？」



ウンディーネの鋭い突っ込み！

サイトの急所にあたった！ 効果は抜群だ！

…む、また電波が。

とにかく硝子のハートを再び粉碎されたサイトはうずくまった。

「大体な、決闘に負けていじけるっちゅうのがすでにあかん！

男だったらもつとしゃつきりせんかい！ そこは浚ってでも引き止めるところやろお！

女の子はな、繊細なんや！」

サラマンダーと一緒に戦争ごっこした彼女は繊細といえるのだろうか。

「イオはんすぐく失礼なこと考えてへん？」

「考えてへん考えてへん」

あ、移っちゃった。

ともかく、ウンディーネの説教はまだまだ続いた。

…つか、途中からサラマンダーとの惚気な件について。幸せそうだからいいけど。

サイトなんか魂抜けかけてるし。

まあ、慣れてなきゃ辛いよな。

説教は一時間に及び、サイトはすっかり屍と化していた。  
のろけ

「結論！　好きな人へは？」

「本気で体当たりすること…です…」

「はいよろしい！」

説教のそけは終了したようだ。

あんまり暇だったからデルフの手入れしてたよ。

「水に落としておいてよく言っぜ」

「不可抗力だから許して？」

「いんや、許さねー。きちんと錆びとりまでしてもらわにやな？」

こ、こいつ…！　錆びとりは大変なんだぞ！

頭に來たので湿気た鞘に押し込んでやる。流石に日向にはおいとくが。

「へくしっ…！」

寒っ！　倉庫に入れてた服に着替えたはいいけど、頭が濡れっぱなしは寒すぎる。

サイトも同様みたいだ。…ちよっぴりつんつるてんだしよけいに寒そうだ。

「まあ、何はともあれありがとうなウンディーネ。これでやることは決まった」

「ええよ、うちも昔みたいに話せて嬉しかったし。また遊びに来てや！」

うん、今度は紅蓮さんと一緒に来るよ。

あいつも何だかんだいってウンディーネには感謝してると思うし。

…あれ、何か大事なことを忘れてるような？

そんな疑問を抱きつつ、戻るためにテレポートを発動した。

## ラドグリアン湖の精霊（後書き）

ウンディーネ登場。またすぐにでる予定。

浮遊術：

聖剣HOMの幻夢の主教が使ってるあれ。

どうでもいいんですが、カリスマで飛行ユニットの上範囲攻撃持ち  
って一体：。

ロジェ（弟兼主人公）は聖剣装備でも跳躍ユニットなのに。

本家の水の精霊様は基本は不干渉の模様なので出てきてません。  
ただ、ウンディーネが呼べば出てくるかも？

素人 i n 火竜山脈（前書き）

というわけで特訓編。

何でかというとは本編参照。

## 素人 i n 火竜山脈

というわけで戻ってきたよ！

しかしもう少し遅く戻ればよかった…とても眩しい笑顔があるんですが。

「よく帰ったなイオ。少し話さんか？ 殺し合いで」

訳：よくも面倒事を押しつけてくれたな。

あーあー、死ぬかも？

だが対策は練っている！

「竜帝、それより楽しいことしようぜ」

「ほう？ 貴様をいたぶる意外に何かあるのか？」

耳貸せ耳。

かくかくしかじかでこういうことだけど…。

俺の提案を聞いて、竜帝は楽しそうに口元をつり上げた。

「成る程、貴様にしては面白い考えだ」

「だろう？ ほら、紅蓮さんもおいでおいで」

「…すつごく悪い笑みですよ先生」

紅蓮さんも人のこと言えない笑顔じゃないか。察しがよくて先生嬉

しいぜ。

サイトが訳判らんって顔してるけど、そんな顔できるのは今のうちだからな？

覚悟しろよ？

（悪寒がつ！？）

む、殺気でも漏れたか？  
いや、勘が いい のか。サイトがガタガタ震えてる。

「なあサイト」

「っ、何だよイオ？」

「お前ルイズ嬢に結婚して欲しくないんだよなあ？」

にんまり神父スマイルで笑うと、サイトは面白いくらい慌てだした。

「違っ！？……うー…あー…違う、ない」

素直でよろしい。

ウンディーネに会えて本当によかった。

「それに、ワールドに勝ちたい？」

「勝ちたい！」

今度はすごい勢いで頷いた。

そんなに悔しかったのか。まあ都合がいいんだが。

「じゃあ特訓しようか」

「…え？」

\*

暖かな地熱、広大な密林に、どっしりとした存在感を出す山々。

火竜山脈へやって参りました！

うん、辺りから色々とヤバそうな気配がするな！

「ちょっと待て！？　ここRPGでいえば上級者がくるような所だ  
る雰囲気てきに！」

「心配するな、別に戦えって訳じゃない。

生き残れ！」

「変わんねえ！」

変わるぞ？

今のサイトには基礎能力が足りていない。魔法衛士隊の隊長という  
ワールドには全く歯が立たないだろう。



そこで、一歩間違えば危険しかないこの火竜山脈でサバイバル！  
生きて帰れば危険察知能力と身体能力が上がるぞ！

つまりさっきの提案は、サイトに手っ取り早く度胸をつけさせよう  
ってことなのだ。

…そういやこっつて外国だよな？ 不法侵入…って今更か。  
まあ、レポートで真っ直ぐきたから不法侵入で捕まることはない  
だろう。ここどう見ても人外魔境だし。

あ、今回はちゃんとルイズ嬢に言ってきたよ、二週間ほどサイト借り  
るって。

その後爆破されかけたけど。

…想い合ってるよなああの反応は。

気合いを入れねば申し訳がない。一応代わり置いといたけど。  
横っちょで竜帝が懐かしそうに目を細めた。

「ドラゴンズホールを思い出すな」

「そうですね…あ、ドラゴン飛んできますよ」

「帰らせてくれ!？」

「バカたれ、帰ったら来た意味がないだろ。

えー、では今日から二週間、サイトいぢ…サイト強化週間にしたい  
と思います」

うっかり本音が。

サイトが思いつきり青ざめたけどまあスルー。

「サイトにはここで、1日素振り千回、食料調達などをしつつ、できればドラゴンからも逃げきれ体力をつけて貰いたい」

「無茶言つなよ！ そんな短時間で体力が付く訳ないだろ？ きつと筋肉痛だつて酷いぞ」

実は無理じゃないんだな。

ヒールライトってさ、筋肉痛にも効いたりするんだよね。限度はあるが。

それを教えるとサイトは小さく悲鳴を上げた。

「あ、命の保証はあるからな？ とにかく荒っぽくても基礎をつけないといけないからな」

サイトがこれからやることには体力と度胸が必要だからな。

技術を教えるのはその後。教えるのは俺ではないけど。

因みに俺は救護係。

紅蓮さんと竜帝にはサイトの命の保証はして貰って、あとは好き勝手にしていいといつてある。

流石にエインシャントと神獣の技は自重して貰うけどな！

あと、狩りすぎるなよと注意しといた。訓練所にさせて貰うわけだし、できるだけ命は奪わないようにしないと。

救護係も楽じゃない。

まだ震えているサイトを安心させようと、ぼんと肩を叩いた。

「大丈夫。ラスボスと中ボスが守ってるんだから死ぬわけがないよ」

「…ラスボス？」

「知リたそうだな？ …訓練が終わつたら、ちよつと話すよ」

そついや、サイト達にはあんまり過去のことを話してなかつたな。  
…俺が覚えてないのもあるが。

どうしようか考えていると、サイトの震えが止まつた。いや、堪えてる？

しかしまつすぐな瞳でサイトは俺を見た。

「…死なないんだよな？」

「俺の矜持にかけても絶対死なさないよ。死ぬほど怖い思いをするだけだ。

話を聞く限りお前の状況は絶望的に悪いし、ルイズ嬢を諦められるなら戻るよ？」

「やる」

短くはつきり、サイトは頷いた。

その目にははつきりとやる気の炎が点つてる。

すつとデルフを差し出す。

「素振り千本、忘れるなよ？」

「へっ！ 1日五千だって振ってやるぜ！」

上等！

さあて、サバイバル生活の始まりだ！

## 素人inn火竜山脈（後書き）

恐らくサイトを初心者状態で火竜山脈に放り込んだのはイオぐらいでしょう。

まあ、パーティメンバーが中ボス×2とラスボスだし、これくらいやってもいいかなと！

…反省してます。けど後悔は（ry

しかしテレポート万能説。

まあ地図を完全に把握している紅蓮さんがいなければ、前話のイオみたいな事になりかねるんですが。

テレポート（改）：

地理を把握してれば魔力の限りどこへもいける。

適当にしすぎると『いしのなかにいる』状態になるので注意が必要。

因みにサイトの代わりに、コピーを作る魔法の応用をしてミニサイズな分身を置きました。

コロボックルサイズですが危険が迫ると教えてくれるように設定してあります。

コピー魔法はベルガーさん直伝。

おまけ

「…くすん、サイトのバカ、イオのおせっかい」

『なくなよるいずう』

「くすん。あんた、イオの作ったサイトの分身の割に馴れ馴れしいわね……」

『だってるいずのことすきだからな』

「ななななにいつてんのよ分身のくせに！」

『おりじなるもそーいうとこがかわいいとおもってるぜ』

「……分身サイト、こっち来なさい。とと特別にベッドで寝かせて上げるわ」

『さんきゅー！』

## 成長記録（前書き）

まとめ的なもの。

決して修行風景が思いつかなかったとかそついうのじゃ（ry

## 成長記録

一日目：

素振りをしたサイトが颯爽とへたばっていたので軽く回復してやった。

素振り程度で疲れてるんじゃない、と言うわけで紅蓮さんと食料を探しに行って貰った。

すると直後に凄まじい火柱があがった。

早くも後悔して現場の生き物達を治療した。原因はファイアボールかな？

新たに火気厳禁と付け加えると、紅蓮さんはめちゃくちゃ不機嫌になった。お前は放火魔か。

そう言ってやったら、

「炎が使えずして何が紅蓮の魔導師ですか」

と言われた。

…つい納得してしまった俺が恨めしい。

因みに、治療した生き物達は襲いかかってきたけど丁寧にお帰り頂いた。

一番でかかったドラゴンを、メルティナモールでちょっと脅かしたら逃げられた。

サイトに本当に神官なのか疑われたけど…。



腹が立つたので実戦訓練をしてやった。

つい熱が入りすぎてボツコボコにしたけど、まん丸ドロップあげたから問題ないだろう。

内容？

簡単な組み手だよ。ちょっと投げすぎたけど。

ちなみにその日は持っていた保存食でしのいだ。

倉庫の中身は腐らないが貯蔵が気になる。どれぐらいはいつてたっけ！…。

明日から食料は俺が調達しよう。

二日目：

早くもサイトが筋肉痛を訴えた。

軽く押さえる程度で回復してやったが、予想外に早かったな。

素振りをさせてから散歩へ行かせる。今度は竜帝が同伴だ。

渋ってたけど、ドラゴンが見えた瞬間にやっと笑っていた。サイト  
ご愁傷様。

その間に俺は食料調達だ。メインは山菜。

幸い食えそうなのは沢山生えていた。万一毒があっても、ティンクルレインで浄化できるから心配ないだろう。

籠一杯に山菜を積むと、道中で火蜥蜴に遭遇した。けど教われはしなかった。

お腹空いてるのかとおもって山菜を上げたら懐かれた。可愛い。キ  
ュルケの気持ちがあった瞬間だった。

火蜥蜴とは途中で分かれて昼食の準備をする。

倉庫に入ってる調理器具を総動員…というほどでもないが、鍋の準備だ。昼だけど。

ちょうどいい具合にできた頃、散歩から帰ってきたサイトは魂が抜けたような顔をしていた。

ドラゴンが…と呻いてるところから察するに、巣にでも突っ込んだのだろうか。

鍋は上手かった。ちょっとピリツと来たけど、まさかな？

その後純人間の二人が腹をこわした。

すぐにティンクルレインで解毒したが、気をつけよう。

昼食後、少々の休憩の後でサイトをジャングルに放り込んだ。

勿論中空で様子見してるので死ぬことはないが、様々な生物から全速力で安全圏まで逃げるサイトを見て、ちょっと可哀想なことしたかな、と反省はした。

夕食は保存食使って美味しくしよう。

そっぴいや気づいたんだけど、俺と竜帝は何故か襲われなくなっていた。

竜帝は本能で強大な存在だと見破られてるのだろうか、何で俺も？ サイトと紅蓮さんは容赦なく襲われてるんだけど。

無事に戻ったサイトには、ご褒美としてドロップをあげていた。流石に一発殴られた。

夕食は宣言通り保存食を使った。  
干し肉と山菜のスープだが、スープは二人とも飲まなかった。…これは安全なのに。

三日目：

恒例の素振り千本と回復から始まる。

しかし火竜山脈での生活が妙に楽しいのは何でだ？

日記を付けてると、紅蓮さんがむすつとした顔のまま稽古を申し出た。

火の魔法が使えないことがそんなに不満かよと突っ込んだら、違うと言われた。

まあ稽古は嫌いじゃないし、サイトは竜帝に任せて散歩に行かせて紅蓮さんと稽古だ。

因みに稽古といってもほぼ模擬戦。

ただ、カウンタマジック使ったら盛大に怒られた。

手加減したらしたで怒る癖に、我が儘め。

取り合えず紅蓮さんをこつてり絞つてサイト達の帰りを待った。

そうしたら竜帝が何かの肉を持ち帰ってきた。

竜帝は上機嫌だったが、サイトはがたがた震えていた。何かあったんだ。

竜帝と同伴させるのはしばらくやめておこう。

因みに何かの肉は味付けしっかりして炙ったら大変美味だった。

残りは保存容器に入れて倉庫に放り込んでいた。サイトが食べれるようになったら焼き肉でもしよう。

今日の昼は紅蓮さんと一緒に訓練させといた。

具体的に言つと紅蓮さんが攻撃魔法（弱め）を使ってサイトがそれをよけるという内容。

被弾率が半端なかった。紅蓮さんホーミングつけるとか鬼畜。

最初はホーミングすんなどと注意したけど、聞かなかったのでメルティナモールで沈めておいた。  
年上の言うことはきこうか！

紅蓮さんを沈めてしまったので、代わりに筋トレさせといた。腹筋背筋鍛えろよ。

そつえばサイトに魔法教えるべきかな？

それ以前に使えるか判らんけど…帰ったらウンディーネに相談しよう。

教えるにしてもある程度剣の腕を磨いてからだな。

## 成長記録（後書き）

セイントビーム：

光属性の攻撃魔法。ホーリーボールの上位。

全体攻撃にすると空から光の柱が降ってくる。普段は手から照射される細いビーム。

紅蓮さんが食らったのは柱の方。

こんな感じで修行風景をお送りしたいと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4663y/>

---

食われた俺のゼロ魔戦記

2011年11月27日12時46分発行